

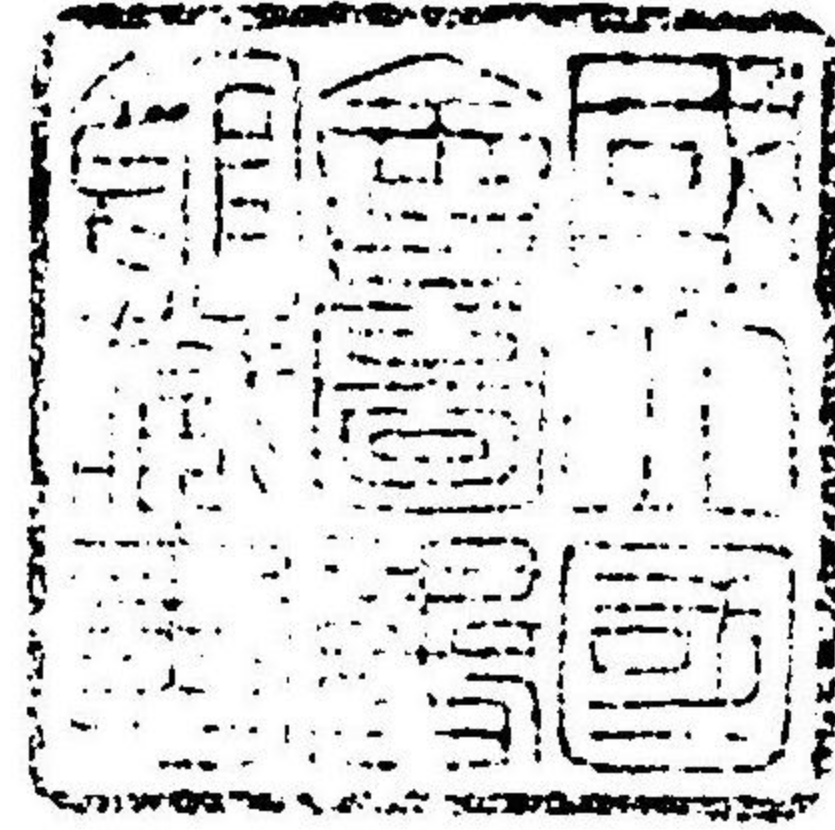
IT-20-39

月夜の福  
又八進福





911.19 H 867m.



一 題 話 逸 人 名

名人逸話に題す

風流翁



名人逸話には、狂歌師に關することさはなれば、こゝに狂歌について、數言を叙すべし。』

眞面目にあらで可笑味を旨とする場合より云へば、狂歌、狂詩、川流、物は附杯の類は皆同じものなるべし。されど之を作ることの離易と、之を作るもの人柄とは昔より差別なきこと能はず。』

今の所謂狂歌は萬葉集古今集杯の中にも見えたり。閑寂の趣味に富める西行法師の如きも亦詠みにき。我だにもまだくひたらぬ水がゆの



337265



底にも見ゆる影法師かな  
 とあるは法師の作なりと云ふ。可笑味は十分ありながら品上りて鄙からぬは、なか／＼にめでたし。』  
 その上狂歌は唯歌人のをり／＼のすさびに過ぎりき  
 徳川氏に至りて専門の狂歌師出來り。本歌は得詠ま  
 ざれども狂歌もて世に持囃されたるもの尠からず。  
 天明度の蜀山人は云ふも更なり空網、管江、眞顔、  
 飯盛、岡持杯はその中でのえら物なりとす。』  
 狂歌は久しく冬枯の誰れ問ふ人もなかりしが、近頃はめづきり春めきて花ある逕の自からにきはふが如し。そが中に一廉の判者とも云はるゝもの二十人は

ありなん。調の高き低き。形の古振なる今様なる。いづれ花もあり柳もまた。』  
 花柳を色別けすれば曰く本町側。曰く八雲連。曰く俳諧調派。みの三つに過ぎざるべし。維新前は山の手より下町にかけ何側何連など稱するもの澤なりしが。今は然らず。』  
 本町側側は連と云ふが如しの調は俗に近ければ世と共に推移ることを得。改進派とも稱すべきは此中に見るを得べし。唯俗に近きを以て時に趣味を破り鄙調に陥るの弊なき能はず。今東京にてはこの派獨り威勢善し。』



本町側の頭領を桃の屋と爲す。繪馬屋、蟹の屋、秋の屋、彌生庵の人々、その外年若き人は必ずしも舊型に拘はらず世と共に進歩せんことを希へり。これを改進派と目して望を屬するもの尠からず。』  
 俳諧調派はいにしへの俳諧歌を其儘奉ずる者なり。故に調は雅にして綺麗なるを喜び俗に近くを嫌ふ。向島の岩上亭はこの派の隊長なり。』  
 岩上亭は近代の名家古面翁の門に學び、翁の初名を襲ぎて面堂と云ひしが、今は他人に譲りて別に門戸を成しぬ。』  
 此派は全く守舊派なり、東京には流行らざれども地

方には末社多し。』  
 本町側と俳諧調派の中を行きて雅なれども片苦しからず俗なれども鄙しからざるは八雲連なり。この派の旗頭を品川の千種庵となす。芝の多摩園も巧に物せしが、故ありて作らず。』  
 千種庵は最早六十餘の老翁にして斯道にかけては造詣頗る深し。つねに襟を掛け裾を端折りて家業を勵み歌詠む人とは露見えざれども、若し打くつろぎて物語るときは諄々として説出づる口尖に自から名人たるの貫目ありと云ふ。』  
 古人も云へる如く、狂歌は古き鼓より新しき調べを



打出すこそ善けれ強て新しき口調に詠出んとすると  
きは言葉いやしくなりて悪しとは。千種庵が百千  
度口にする金文なり。これに因りても其調の如何を  
知るに足るべし。』  
古面翁が存生の頃は八雲連の羽振甚だ善かりしが。  
今はこの派に屬する人思ひの外尠なし。そは入り易  
く詠み易く手取早きが今の人の性根なればならん。』  
此處に本町側、俳諧調派、八雲連三派の頭領株の吟  
詠を掲げてその特色を示すべし。

植 物

妾宅にうつせる松も地堀もの

桃 の 屋

みつきしばりの雪除の繩

器 財

同 じ 人

とき出しに見せたる月の輪嶋ぬり

くもりはいとふ會席の膳

調は當世向にして稍々俗なり。初心の人は時として  
踏外すことあるべし。

文明開化

岩 上 亭

色にいでぬうけらが花のむさし女も

ひらけゆく世は都びにけり

閑居時雨

同 じ 人

律生る庵のかよひ路人こねど



やよほとゝぎす露ばかりなけ  
調は雅にして綺麗なり。古振のまゝ一足も踏出した  
る所なきを見る。

春の歌 千種庵

鶯の初音につれて春の山

谷わたりする雪解の水

夏 天 象 同 じ 人

さやけさは春秋よりもますかゞみ

かすみもきりも夏のよの月

桃の屋の如く今めかず。さりとして岩上亭の如く古く  
もなし。これを雅俗の中を得たるものとす。

古面翁は十數年前に死にき。存生中は八雲連の歌調  
を以て一世を風靡したり。この人業を眞顔に受け世  
世の歌集、日記、物語の類にも眼を曝して學問該博  
句中の用語根柢あるもの多く實に近代の名家なりき。  
翁が狸の歌に。

ほんくが痛いとうそを月の夜に

つゞみのけいこやすむ子だぬき

とあるは人の善く知る所にして大方は蜀山人の作な  
りと思ひ。落語家杯もをりく高座の上にて例に引  
くことあり。されど實際は蜀山人の歌にあらず古面  
翁の作なり。



俳句、川柳、狂詩の類は既に世間に流行せり。狂歌も亦間もなく流行すべし。これに志すもの彼の芍薬亭が云ひけん狂歌は雅中の俗、俗中の雅なりと云へる言葉有味ひ。そを實にするを得は言分なし。』書中狂歌に關するものは、大方繪馬屋氏の補助になれり。繪馬屋氏は家學を承けて頗るこの道に精しく。改進派の頭梁なる事前に云へるがごとし。家は青山の紅塵至らざる所に在り。』







# 名人逸話

風流

## 女房は家のかため

むかし何某といへる人妻をめでりしに。容貌はさのみ醜きにはあらぬど。片目志ひたる女なれば。そを愛きことに思ひて。終にはかくどあしざまに云ひのしりぬ。その妻頼みなき夫の心を怨みてある時

みゆよきは夫のためのふためなり

女房は家のかためなりけり

どかこちけるとなん。

死んだ子の年





窓のむら竹は後にも云へる如く、青山久保町に住して、野菜物をひさぎて生業とせし一奇人なり。朱樂管江の門に學び、後管江の別號を繼ぎて芬陀利華庵と稱す。文化十年の秋、十九歳になりける一人の娘を失ひければ、それを悲みて

死んだ子の年を十九とかぞふれば

親ゆびばかりのこるかなしさ

### 水戸烈公の狂歌

水戸烈公、或る歳の正月、小石川邸にて具足開の式を行はれしに、立原甚太郎と云へる人、そのをりの年男なりしが、式に臨みて香の物を座の中に落しければ、あはて、取上げ、袖の中に入れしさま。最とをかしかりしを、烈公見給ひて

この春の具足びらきぞいさましき

まづうち落す大がうのもの  
かく詠み給ひて。歌をば立原にたまはり、ひと言の御答めもなかりしとは、いとく有りがたし。

### 藤田東湖の狂歌

あるとしの八月十五夜に、烈公宴を好文亭に開き、東湖を召して和歌を詠せよと命じたまひけるに、東湖答ふるやう。臣まことに和歌を能くせず。大嫌ひに候と申上ければ、公聞きたまひて、その大嫌ひを題にして詠みてはいかにと仰せあり、東湖やがて

大嫌ひほどけ坊主に薩摩寺

のらくら者に利口ぶる人

公大に笑はせたまひ、予も亦大嫌ひなりとの給ひけるとなり。

### 春の團扇



紀海音は淨瑠璃作者の名人にて、世の人の能く知れるところなり。あるとき年頭の禮に、兄鯛屋貞柳の許に團扇を贈りけるに、貞柳これを見て、年禮に團扇とは珍らしとて

物ずきにていかよければ夏のもの

春にもつかふうちはゆるなり

### 守屋せんなん

守屋仙庵は醫を業とし、狂歌を蜀山人の門にまなびぬ。性として酒を嗜むこと甚だしく月の夕、花の晨はいふもさらなり。身を終るまで一日も盃を手にせざりしことなし。辭世の歌を

われ死なば酒屋のかめの下にいけよ

もしや栗のもりやせんなん

といふ。おもしろき作なりけり。

### 酒は風流の眼

天廣丸、別號を粹龜亭といふ。唐衣橘洲の門人にして、栗本狂歌所の御座歌人たり。性として酒を好むこと人に越えられたれば、酒の歌に秀吟多く、酒百首を詠みき。そが中に

くむ酒はこれ風流の眼なり

月を見るにも花を見るにも

とあるを、石に彫りて墨堤に建てぬ。今尙ほ白鬚のまへにあり。

### 蕎麥のうちかた

天明の頃、深川に翁そばと云へる蕎麥屋ありけり。そが家の妻は頗る美人なりしが、當時名高き狂歌師四五人、この家に立寄りて蕎麥などたうべたるをり。妻の美しきをかかくと云ひあへりしを。問



屋酒船(南新堀)に住し、井上幸二郎と云ふ。聞きて詠める歌に

御亭主のやく身をそばに置きながら

志なのよいことうちかたを譽む

### 浦井のこひ

むかし京都に浦井何某といへる町人ど。また鍼醫何某といへるものあり。二人ともに園池三位卿の許にまゐりて。歌など詠みて深く交はりしが、あるとき浦井鯉を得て、鍼醫の許に贈りけるに、醫はまた珍らしき鯉なりとて、園池殿に進上しぬ。園池殿も見事なる鯉なればとて、又浦井の方に贈りたまひぬ。浦井はわが贈りし鯉のめぐりくつて再びわが許に返り來りしを、をかしと思ひ、事の上しをまかくと打明けて物語りしに、三位殿聞きたまひて、はり先にかゝりし魚をその池に

はなせばもとの浦井へぞゆく

### おや玉げ升

五代目白猿は狂名を花道のつらねと云ひ、その名一世に聞えたり。

あるとき最負の客によみて贈れる歌に

ふつゝかな關東べいを御最負は

わがみながらもあや玉げ升

### 古めくはしくは

寛延の頃、或る人二世市川柏齋の許に、桐の箱に入りたる菓子を贈るとて、せうそこの未に

御上りあるべいならばかたじけな

古めくわしくはござりますれど



と書付けしを見て、相筈が即刻返せし歌に

古めくわしとはのたまひどあたらしき

箱にあさはふかき御佳作

### 風早のふり出し

蜀山人、あるとき五代目白猿の許を訪ひしに、折ふし神並周全といへる醫師居合して、狂歌をよまんと思へば、相應しき名を附けたまひてよと乞ひけり。この時雨まきりに降出しければ、風早のふり出しとや呼ぶべきと、白猿の云ひしとて、蜀山人

風早のふり出す雨のをやみなく

はやるは君が福の神並

と詠みしに神並の返し

雨ふりて地かたまる名もあらたまる

### 稲の穂波のお使

よい風早のふつき萬福

狂歌堂真顔、文政十一年京都二條家より、俳諧歌の宗匠を許され、俳諧歌場四方歌垣と云ふ。さるにその後京都栗本狂歌所穂波三位殿の家臣、松井多仲といへるもの、真顔の許に最とむづかしき筋をいひ送り、狂歌をよまんとならば、穂波殿の配下となりて免許状を乞ふべしなどいふ。あだやかならぬ不筋のことを云ふにぞ。或る日真顔、多仲に面會して、狂歌師の由來、狂歌の祖神のことなど問ひ試みしに、明に答へえず、遂に真顔が爲めに偽者なることを見破られ、只管詫入りて何處ともなく逃去りけり。その時真顔がよめる歌に

實のいりし稲の穂波のお使は  
ふしたるまゝに頭あがらず。



濱邊黒人の辭世

濱邊黒人は本芝二丁目に住し。三河屋半兵衛といへる本屋なりき。老後剃髪して齒を黒く染め、常に青きいろの道服をば着けたり。故を以てこの頃の人、齒までの黒人と呼びなしぬ。狂歌に入花といへることは、この人の初めしところなりと云ふ。辭世の歌とて世に傳ふるは

黒人が黄色の人にならんとて

濱邊をすて、川ぎしへゆく

この歌の意は芝の濱邊を跡にして、黄泉の客とならんといふを。黄色の人とは云ひしなるべし。川ぎしへ行くとは、川岸の寺に埋葬せしにやあらん。

狂歌よみの門人

狂名を歌舞伎の工と云ひしは、へつゝい河岸に住せし狂言作者中村重助がことなり。初め俳諧を好みて只管この道を修めたりしに、たまく狂歌を味ひしより、遂に俳諧を廢めて蜀山人の門に入り、狂名をば前の如く名告りて狂歌よみとはなれりき。入門のときの歌に

あもしろいことをはやらせ給ふかな

われらもきやう歌よみの門人

不時の若死

英一桂といへるは、北窓齋一蝶の四世の孫にして名を信重と呼びぬ。天保十四年十二月二十一日、歳八十五にして歿す。辭世の歌に

二三百生きやうとこそ思ひしに

八十五にて不時の若死

地水火風返上申



川上不自は如心齋が門人にして號を孤峯といふ。又圓頓齋。蓮花庵とも云へり。茶技に秀でし人にして名聲世に高し。文化四年十月四日歿す。辭世の歌に借用申。地水火風返土申。今日今日とありて

妙々の妙なる法に生れ来て

又妙々の妙に死にゆく

### 由縁なるらん

由縁齋は初め鯛屋貞柳といひ。狂歌を入幡山豐藏坊信海に學びて。大坂南御堂前に住し。菓子製造所の主人にして山城掾と稱す。ある歳南都の松井和泉といへる油煙所より。大形の墨をば大内へ献上ありしと聞き

月ならで雲の上まですみのぼる

これはいかなるゆえんなるらん

とよみにき。この歌端なく堂上に聞え。やがて由縁齋の號を贈られしと云ふ。

### 順にいつてはおれがたまらぬ

花の本爲山は近頃世に聞えし俳諧師なり。ある歳妻歿りければ。その時詠める歌に

世の中のさかさまごとは嫌へども

順にいつてはおれがたまらぬ

### 雷電の手形

雷電爲右衛門は雲州侯のお抱角力にして。世の人の能く知るところなり。ある時扇面に墨もて手の形を押したりしを。蜀山人見て讚をものしぬ。



百里をも驚かすべき雷電の  
手形をもつて通る關どり

東寺の畫龍

文政の頃、東寺にて佐伯岸駒に天井の畫を描かしめき。畫は雲龍なりけり。やがて成就しければ、謝儀として二十兩の金子を贈りしに。岸駒これを不足とし。己が百兩納めたることに執成して、百兩の寄進札を建てしむ。當時人々聞きりてかれこれ批判せしが、その時の落首に

百兩が岸か寄進かしらぬども  
東寺畫龍のたかい天井

君が代の道

むかし武州川越に茂躬といへる人ありけり。號を櫻曙園といひ狂歌を能くしぬ。ある日僕に命じて庭面を掃除せさせけるに、隣家のあるじ竊に笑ひていふやう。苔蒸し木の葉ちり積みたるは。さびたる景色最どをかしきものなるに。そを奇麗に掃除さする主人の不風流さよどつぶやきしを。茂躬いかに加して聞知りけん。

ゆたけしや諫鼓の外は掃除して  
苔ひとつなき君が代の道  
と認め、隣家の主人に與へしと云ふ。

磨いたやうな藝はなし

陸奥の會津に桃三千丸といへる狂歌師。書畫は素よりくさくさの藝道に通ずる人なりしが。ある時さる大家に召れけるに。人々酒興に乗じてかくし藝を出し。あるは舞ひ。あるは唄ひて笑ひさいめきけ



れども、三千丸ひとり黙々たり。家のあるじ三千丸に向ひ。何か一  
藝いだせよと云ひければ。左の歌を短冊に認めて謝しぬと云ふ。  
くもりなき世に生れても何ひとつ  
磨いたやうな藝どてはなし

季吟と信海の贈答

北村季吟は舊幕府の歌學所にて、號を拾穂軒といひ。國學の達者な  
りけり。一歳新玉津島に赴きしをり。八幡山豊藏坊信海が許に。文  
通のみして遂に訪れざりければ。信海より

みがきあてゝ光ましたる玉津島

足がないやらこゝへどひ來ぬ

と云ひ送りしに。季吟取敢へず

玉津島女神にてましませば

男山へははちてまゐらぬ

と返歌したりとなん。

味なきものをくうそん

むかし都に空尊といへる法師ありき。さる堂上家へ招れて。手厚き  
饗應にあづかりしが。如何にしけん向齒一枚ぬけて痛み堪えがたし  
とて。料理の膳部には箸もつけず歸りければ。同席なりし豊藏坊信  
海とりあへず。

結構な料理の膳にむかふ齒の

ぬけて味なき物をくうそん

志かまのかち栗

成る歳播磨の何某の許より。かち栗一袋。はるく松永貞徳の許に



贈り越しければ、貞徳かよみける歌に

ねんころにうへをはりまの紙袋

見ればまかまのかち栗ぞかし

### 松の井の酒

寶曆の頃、美濃の關といへる所に仙樹と呼べる人ありけり。日頃むつまじく語ひける菊屋何某といへるもの。松の井の酒を贈るとて云ひこせしのみにて。日數経れども音沙汰なかりければ。仙樹が歌に  
千とせをも延びるよはひときく屋から  
あくりたまふを松の井の酒

### けふかあすかい

延享甲子年の冬、宇佐八幡宮へ、勅使として飛鳥井雅重御下向ありけり。

その時藝州廣島なる栗林堂が詠みし歌に

世のうさを祈らんための奉幣使

あかへりはさてけふか飛鳥井

### くら屋又七郎

いつの頃なりけん。くら屋又七郎といへる大鼓打。美作より上京す

とて途にて落馬し。腰の骨をくじきたれば。松永貞徳が

一せいの鼓をのするくら又は

落馬をしても腰をこそうて

と詠みしを。幽齋法印聞きて

見まさかやくめのさら山さらくど

砂をつけてや打拂ふらん

とよまれしとぞ。これらの歌は世に知る人稀れなるべし。



むり足のかね

ある人。塵外樓清澄が許に。この月の末までこがね五兩貸し呉れよと云ひこしければ。貸し與へけるに。晦日となりて違へず返しけり。さるにその翌日またく金を貸し呉れよと云ひこしければ

十五一二十一さへあるものを

たしかせといふ無利足の金

なき坊主

むかしようちくといへる人あり。物毎に最と感じやすき性にて。芝居など見るときは。日一日泣きつめて目を泣きはらすと云へり。故に人々みな泣坊主と綿名しき。この泣坊主ある日。花道のつらぬ(五代目白猿)の許を訪ひて。喜撰といへる茶を贈り。そのつゝみ紙に

きせんとはあつがもなない歌よみよ

われは狂歌に名もなき坊主

の一句書付けあり。つらぬが返しに

下さるゝきせんのお茶のそのぬしを

ようちくさまと人は云ふなり

へづつ東作

平秩東作。本郷のほとりに假住居して漢書など講義せしをり。六樹園訪ひ來りたれども。折ふし東作留守なりしかば。筆を執りてかたへの壁に書遣せし歌に

聖堂のうしろに儒者の香のするは

孔子のひつたへづゝ東作

ことば七兵衛



六樹園飯盛。此歳の大小なりとて十二月を見立たる文を綴り。蜀山人の許にあくりけるに。いかにしけん七月分の詞をかき落したり。蜀山人たはふれに。

五のしるし六樹の園はありながら

など七兵衛といはぬ大小

として六樹園許云ひやりけるに。飯盛取敢へず

恥らへて名のりもかゝぬ文月は

君にとられし詞七兵衛

と返しけるとなん。飯盛は俗稱を練屋七兵衛と云ひければなり。

### つきぢ善公

寛政十二年六代目市川團十郎が一周忌追福狂言に。七代目團十郎外郎賣をつとむ。この時坂東善次(つき地善公と云ふ)相手にて評判善

かりしかば。花道のつらね(前に出づ)が歌に

追善の相手はつきぢ善公寺

さて評判がとんだよしみつ

### なむあみだぶち

朱樂管江。年頃一疋の犬を愛して飼ひ置きけり。さるに程経て病にかしり斃れしかば。厚く葬りて跡ぬもどろに吊ひ。後石の志るしを建て。さて管江の詠みける歌に

來世にてならば佛果をえのころよ

なむあみだぶち

### この手打そば

狂歌堂眞顔。ある日親しき友人を訪ひしに。その人蕎麥を手製に拵



へたれば。折こそよけれ振舞はんとて。女房ともくまめやかに  
應し。いざかへ給へどたび／＼器に盛りて強ひられければ  
たつこともなら坂やこの手打そば  
ふたもりかへをゆるせかしは木

蜀山人の施行

或る歳の末。北風はげしく吹荒みぬる日。蜀山人所用ありて淺草寺  
の裏手を通りけるに。田の小徑に女乞食の病にやかゝりけん。うめ  
き苦しみぬるを見て。錢など與へ。又懷中せられし萬金丹といへる  
藥をも惠みければ。女乞食涙を流して最と喜びけるとなり。その時  
蜀山人の歌に  
北風はけふはなふきぞいたづらに  
むしもかぶれりこもゝかぶれり

すくふべき力なければいたづらに  
萬金丹をくれてこそゆけ

のどぎくぎくう

豐藏坊信海に向ひて或る人。勝尾寺に義空といへる狂歌の上手あり。  
お僧も彼の人には及ぶまじといひければ。信海聞きもあへず  
わが歌になどてあなたが勝尾寺  
のどぎくぎくうさせて見せませよ

一代一首の歌

野州足利の里に。布屋何某といへる禪宗の歸依者ありけり。ある禪  
僧より  
かなでいろはにはほと聞えたか



と示されぬ。その後歳七十餘にして歿りけるが、その夕筆を執りて  
ちりぬるをわが身ひとりと思はぬば  
あさきゆめ見しゆめの夢の世  
と。一代一首をのこせしと云ふ。

おもひ子

酒三不埒(懸川春町とも云ふ)妻を娶りて、その中むつまじかりしに。  
あや／＼の心に叶はざればとて、子のある中を離別しけり。後添を  
迎へよと知人の勸むるに答へて、よめる歌に  
おもひ子はにえこぢるともまゝ母の  
手鍋にかけずたき守たてん  
とあり。手柄岡持これを見て

みどり子はてしほにかけてもり立よ  
かう／＼ならばさいはなしども  
として贈りけるとなん。

たから市

天明の頃、萬象亭が寶合といへることを催はしつるよしは、昔人の  
知るところなり。その時手柄岡持の許に寶合の狂文を乞ふとて、萬  
象亭

お願ひを何分おきすみよしの

寶のいちを出してたまはれ

と云ひやりしに。岡持が返し

趣向にもつきすみよしと思へども  
仰せはかしまり升の市



山崎櫻齋の名弘

山崎櫻齋と云へる人。名は春秀。通稱を平三郎と云ふ。舊幕府の大御番小普請にて。最も指戦の技に長じ。山の手にて大關の名ありき。又筆才ありて狂歌俳諧を能くしぬ。一歳指戦の名弘に團扇を配り。その面に

うつけんの指もあうんの仁王尊

握ることぶしにひらく手のうち

と。自作の歌を認めたりとぞ。

晝夜詰めたる御殿の内

よ、い三津と緯名を受けたる。故の坂東三津五郎の弟子に番太郎といへる滑稽者ありけり。この男物真似が大の好きにて。たびく師匠

よりかすを喰ひしが。ある時大失策を爲して如何に詫びれども叶はず。その儘追ひ出されしに。折からその日大雪なりしかば。三津五郎も不憚に思ひ。どんな姿にて出で行くにやと。窓の隙間より覗き居りしに。此方は門口にひつたり据り晝夜詰めたる御殿のうちと。自分でちよびを踊り。『四段目』の臺詞を遣ふそののんきさ加減に。三津五郎腹を抱へて笑ひながら。呼び戻して勘當を免したりとぞ。

五十歳の鶴千代

いまの片市。まだ蝶十郎と云ひしころ。喜代三郎。福圓等と一座にて備中倉敷に赴き『仙臺萩』を演じぬ。片市は仁木と八沙の役なりしが。旅中のことなれば子役に困り。鶴千代になるものをいろく穿索せしに。或る料理店の娘十一歳にて見柄も善かりしかば。両親に頼みて替古をさせ初日を出すことしぬ。さるに例の殿様馬のところ



にて。急に場うてがし。もう厭だと云ひ出しわい、泣くにぞ。芝居一同大に困却し。今更幕を明けぬわけには行かず。見物はそろそろ騒ぎ出す始末にます。途方に暮れしが。床山の喜作と云ふ五十男。日頃氣輕のもの故座方の迷惑を察し幸ひ身形が小さいから私が鶴千代になりませうと云ふ。五十以上の厳苦茶親父が子役をするとは。前代未聞のことなれども。兎に角今日の處だけ間に合へば。翌日は又翌日の風が吹かうと役者も承知し。右の喜作を鶴千代に扮装せて幕を明けしが。田舎の芝居故際立ちて不思議相にも思はぬ様子なりしも。出てある役者は鶴千代の顔を見るたび。をかしく堪らず。流石の入汐も思はず吹出し。いまだに談話の種とはなりしと云ふ。

自分も記憶せず

二代目澤村國太郎は。長刀の技に通じて。一廉の士も手向ひかねし程なりき。一世の當狂言甚だ多けれども。就中「萬の葉」が大の得意にて。生涯に何度勤めたるか。自分も記憶せざる程にて。この度毎に大當を取りしと云ふ。

むさいくらし

むかし吾足齋と云へる人。年老けるまで妻を迎へず。獨身にて世を送りければ。知れる人々吾足齋は何故妻を娶らぬにや。男やもめは掃除なども行届かず。居心あしきものなりなど竊に云ひ合へるを聞き。左のごとく物しぬ。

小さいな住居はならず女房が

なければむさいくらしなりけり

田地辨納



陸奥の百姓にて何某と云へるもの。ある歳秋の貢おこたりければ冬になりて地頭の庭にいましめられぬ。折から雪痛くふり出しければ。申上ぐべきことの候。まばし細目をゆるさせ給へと乞ひけり。何事を申すにかど誓し手をゆるめけるに。その男聲高に田地辨納と云ひ秋の田のかり田のあどを答められ

わがうしろ手に雪はふりつゝ

と口吟みければ。これにめで、免されしとなり。

ごばんの留主

元の奎綱。西の久保に住せし頃。ある藩中の友達を尋ねゆきしに。折あしくどのゐの留主にてあるじに會はざりければ。ふどころ紙に斯く

われも人に留主をつかふはたがいせん

碁ばんどまらで尋ねくる石

と認め立歸りしに。翌日使にておこせし返歌に

かくと聞いてなんと將碁のばんの留主

みなふひやうしな後手に成金

神もいつはる世

六位大酒官樽次。ある日神田の社にまうで。神酒徳利をふり見て詠

める歌に

當世は神もいつはる世なりけり

かんだといへどひや酒もなし

くれない毛拔

むかし芝の邊に。柳屋といへる小刀などひさぐ家ありしが。或る日



旅の僧入り来りて、鼻毛拔を求めんとて一つ手に取り、この毛拔はくふかと問ひしに、主人本来空なりと答へしかば、

くふならばたゞくれないのはな毛拔

柳がみせはみどりなりけり

と一首の歌をよみて、價も拂はず毛拔を持ちしまゝ出行きしとぞ。

谷風

天明の頃、世の中に一種の風邪流行して至るところ侵れざるものなし、その頃谷風梶之助と云へる相撲、並びなき強者なりしかば、人みな此風邪を谷風と云ひぬ、橋洲の歌に

●水ばなのたれかはせきをせかざらん

關はもとよりつよき谷風

竹本住太夫

竹本住太夫、大阪に歸るとて名残に、新薄雪物語刀鍛冶の段をかたりぬ、蜀山人これを聞きて

のぼりては又きくこともかたな鍛冶

らい國としを待つぞ久しき

ぬけまゐり

寶永二年酉の閏四月、伊勢參宮にぬけ詣りをなすものおびたしく多かりしかば、ある人の詠める歌に

御代なれや古かけまでも酉の年

いかなる家にもおはらひがあり

清水如水

清水如水は江戸横山町に住し、號を藤根堂といふ、性酒を嗜みて醉



へばのびくとして這ひ歩くを常とす。藤根堂の名はこれより出づるとなり。或る時大和法隆寺に藏する賢聖の瓢と云へる器を見て、瓢に彫刻する術をさとり常に鈍刀を用ひて刻みけるに。其技甚だ巧なりければ、就て求むるもの次第に多くなりぬ。さればこの瓢の爲めに身を押しられたりとの意にて、自ら迷淵樓蟠鯨侯と云ひぬ。享保十三年正月三日の朝起き出で、

公事喧嘩地震神鳴火事晦日

飢饉煩ひなき國へゆく

と一首をものし、同じく五日と云ふに。髪を剃り浴湯などして太神宮を拜したるまゝ終りしと云ふ。

### 時平忽ち松王となる

鼻高幸四郎、藝名一世を傾倒せしが、取る年には敵しがたく、何時

しか老耄たりと見え、或る座にて菅原傳授手習鑑の時平を勤めしにその前松王を勤めしことは數次なれども、時平は初めてゆゑ、われ知らず間違ひて、車の上にて松王の臺詞を遣ひ出せしかば、松王を勤めし海老藏、梅王の高麗藏、櫻丸の紫若など何れも仰天し、見物も亦是れには吃驚したりと云ふ。

### 富十郎の儉約

中村富十郎、難波の太夫とて一時は飛ぶ鳥も落すばかりの役者なりしが、至て節儉家にて、自分の家にて用ふる巻紙は、諸方より來る手紙の端の白きところを切り、それを縫ぎ合して用ひ、あまり小さき分は、澤山溜置きて芝居の雪に賣りしと云ふ。又芝居休業中は男共を従へ、みづから鍬を執て百姓の真似を爲したることもありき。

### 高時公の御命日



中村傳五郎、前名を驚助と云ひ、芝翫の弟子なりしが、故ありて中村勘三郎の弟子となり、名題に上りたるをり傳五郎と改めぬ。先年團洲と共に京都に上り、祇園館にて『高時』に城の入道を勤めしが、或る日腹痛してわが身にのみ心を奪はれ、諫言の場にて今日は御先祖義時公の御命日と云ふべきを間違ひ、高時の前にて高時公の御命日といひ誤り、見物は一向氣付ざりしが、團洲より大に小言をいはれぬ。されど全く腹痛の爲めなりしかば、この由話して事済みたりとぞ。

是れからは自個が相手だ

右の傳五郎、嘗て『缺血』に脛平を勤めしが、その状真に迫りてにくくしかりければ、或る齋の者いきなり舞臺に飛上り、なんぼ芝居でもあんまりだ。さあ是れからは自個が相手だ野郎生かしては置かぬと

拳を振上げ、傳五郎の天窓をいやと云ふ程打擲りたり。この騒ぎに出方一同止めに遣入り、果は大笑で濟みしが、傳五郎はわが未熟の藝を、斯くまで熱心に見て呉れしは、此上なき名譽なりとて、翌日赤飯を最負の人々に贈り、左の一句を添へぬ。  
御最負のちから拳ぞありがたき  
ど、何とやらいふ書に見えたり。

西行の七瀬川

西行法師、諸國遊歴の途次、ある時津の國七瀬川のほとりにて、麥こがしを食ふとてむせられけるを、折ふし通りかゝりし馬上の侍これを見て

この川は七瀬のかはどきくものを  
お僧を見ればむせわたるかな



といひかけしに西行とりあはず

この川は七瀬のかはときくものを

めしたる馬はやせわたるかな

と返されしと云ふ。

### ちよつと椽まで

加茂季鷹。ある日山寺にいたり。住僧に毛氈を借りうけ。ひねもす遊びくらし。夕暮に及びて彼の毛氈を寺の椽先に置き。一言の禮をいひはで歸りぬ。住僧日暮れてのち。毛氈はいかにせしと立出で見ると。たゞみたる儘椽先にありて。そが上に何やら書付けたるものあり。取りあげ見るに

毛氈をかりるときには地藏顔

返すときにはちよつとえんまで

### 谷風と小野川

谷風梶之助は。力あくまで強く。その名世にきこえたり。天明二年三月二十八日。淺草藏前八幡の社内にて角力興行ありしとき。初めて小野川榮藏に負けたり。その時朱樂管江と蜀山人の狂歌に

手練せし手をどうろうがをの川や

管江

かつと車のわつといふこそ

蜀山

谷風はまけたくと小野川が

かつをよりぬの高いどり沙汰

### 菊五郎の豪氣

三代目尾上菊五郎。ある時金主大久保今助と口論を生じけるに。名におふ氣早の菊五郎なれば。金主なりとて少しも恐れず。汝が腕に



てこの菊五郎が切れるなら見事切て見よと。尻ひんまくりて詰寄りしを。人々中に入りてやうやく取まづめしが、後に蜀山人が菊五郎に贈りし歌に

江戸子の龜の尾上の尻まくり

サアこゝを切れたつた今助

### 軍中の狂歌

昔志水伯耆守清久、若年の頃、佐々木祥禎の陣にありて、織田信長と對陣しけるに、味方利あらずして國にかへるをり、兵糧盡きて數日食せず、やうやく近江國鏡山の麓まで退きしが、諸軍痛く疲れければ、清久戯れに

駒なへていざ見てゆかかんかみ山

めしくはぬ身の瘦せやしつると

とよみしに、許多の兵士苦しきが中にも、思はず吹き出しけるとなり。

### 正念坊の辭世

正念坊は、都に近き岩端といへる所に住ひし面白き僧なり。飯を炊く毎に、飯櫃を抱へて佛前の位牌の方をまはり、それ噺げくといひたる後、あのれも喰ひ人にも喰はするを例とす。また漬物などするときは、石地藏を持ち來りて押となし、鹽梅よく頼むよなど戯れれるよし、辭世の歌を

來て見てもきて見ても皆おなじこと

こゝらでちよつと死んで見やうか

といへり。

### 七五三助の運命



奈川七五三助は、浪華の狂言作者なり。天保元年江戸に來り、菅屋町市村座に出勤す。ある時火事に遇ひて、住吉町のわが家に火のからんとせしかば、七五三助驚きて衣類諸道具を、菅屋町河岸の藍師友九郎の土藏に頼み入れぬ。さるにこの友九郎こそ火元なれど、何者の所業にや。焼残りし土藏の戸口打毀して、焼木杭など打込しかば、遂に一品もあまさず焼け失せたり。七五三助この有様を見て、いたく力を落し、わが運命も大方は知れたりとて、人の止むるをも聽かず、一首の狂歌をのこして古郷へ立歸れり。その歌は  
何事も烟りときえし世の中の  
火宅の首途灰さやうなら

### 坐頭の頓智

むかし或る大名、扶持をあたへ置く坐頭に、茶を挽かせて呑みこい

ろみ給ひしに。その味悪しとて、いたく機嫌をそこねしかば、彼の坐頭とりあへず

あらくとも我がどがのほど覺すなよ

茶臼に目なしひきてにもなし

### 武田信虎の鼻入

武田信虎の女、菊亭殿と婚姻の約束整ひしが、いまだ嫁入も済さるうちに、舅の信虎、菊亭殿へ参られければ、何者の口吟にや。一首の落書をぞ認めける

むこいりをまだせぬ先に鼻入

きくていよりもたけた入道

### ころり坊主



山岡明阿彌名は俊明。左二右衛門と稱し。狂名を大藏千文と云ふ。博學にして和文を能くせり。隱居しける後、髮を剃りて明阿彌陀佛と云ひぬ。その時の歌に

けふからはころり坊主になりひさご

人にかゝりて世をわたらばや

### 蜀山人と揮雲堂

名古屋に揮雲堂といへる筆墨を商ふ家ありけり。その主人酒を嗜みて飽くことを知らざりしが、人の勧めに従ひ禁酒せしとき、蜀山人より

すきなれば随分酒ものむがよし

野間で死んだる義朝もあり

といひ送りぬ。その折主人の返歌は

すきなれば随分女郎も買ふがよし

川で死んだる辨慶もあり

と云へり。揮雲堂は陳元賛が尾州に來りし頃より榮へたる家なるよし。今は如何にや知らず。

### 借せん旦那

むかし番町のほとりに住みける座頭。黄金數多貯へて。世を豊に送りけるが、ある人の頼み厭止しがたく、貯へし金多く貸し與へしに如何なるわけにや。返済の期日過ぎて返し來らず。人をもて催促しけるも利足さへ拂ふことなし。あまりのことに座頭みづから先方へ行き促せしに、主人はいたく酒に酔ひ倒れて、何事も耳に入らず。一向その甲斐なかりければ、座頭大に腹立ち。口ぎたなく云ひ罵りて、一首の狂歌を詠みぬ



こなさんは借せん旦那寝釋迦にて

利もくれんそんじやあゝ何とかせう  
腹立ちたる折にもかゝる歌を詠むとは、これも並外れたる男なりかし。

### 土岐丹後守

土岐丹後守京都所司代たりしとき、五月端午の夜、邸内より失火して全焼となりしかば、或る公家の町人の口吟みし體にして、焼跡へ立てし歌に

時も土岐たんのばんに火を出して

江戸へまれたら御所司せんばん

とありたり、丹後守これを見て打笑ひ

さつきやみ我はあやめもまらぬ火の

つくしと人にあだ名よばれん

と詠みしと云ふ。歌のころは、我れは少しも知らぬことにて全く過誤なりと云へるなり。その頃俗に鹿相せしことをつくしと云へりしかば、まらぬ火のつくしとは續けしなるべし。

### 篠田金治蓮を盗む

狂言作者篠田金治は、元幕府旗下の士の子にして、未だ部屋住の頃、本所割下水の下屋敷に留居し、狂言作者並木五瓶と親しく行通ひしが、ある日隣家の庭に、蓮の花美しく咲出しを見て、物好の心むらむらと起り、密に忍び入りて盗みとりしを、生憎や其家の小者に見現はされ、事六箇敷なりて遂に親々の耳にも入り、家をば追出されたり。その時

蓮の實のどんだわるさがあらはれて



尻をまき葉のやぶれかぶれに  
と詠みにき。その後寄邊なまきまし。並木五瓶の家に至りて狂言作者  
となり。五瓶歿後その名を継ぎて。二代目五瓶とはなりぬ。

### 三尺坊の神罰

名古屋五條町に。五條坊木見と云ふ人ありけり。天明頃の絲商人に  
て。美濃風の俳諧を能くしぬ。一歳遠州秋葉山に詣しとき。己が名  
によせて

我よりは四丈七尺短くて

三尺坊のお名のたかさよ

と感れしに。身内すくみて動くこと能はざりしと。物の本に見えた  
れども。怪しき説なるべし。

### 勘當の狂歌

秋長堂河井物梁は。狂歌堂真顔が四方側（蜀山人の流れを汲める連  
中と云ふが如し）の判者にして俳諧歌を能くす。ある時放蕩なるわ  
が子を勘當するどて。詠みし歌に

ぬか味噌へ慈悲のきうりの當座漬

きたないゆびも切るにきられず

腹たつも笑ふもけふはなき上戸

酒のいけんもみなぬかに釘

### 芙蓉花の繪馬

芙蓉花は號を一本亭と云ひ。鯛屋貞柳の門人なり。江戸に來りて淺  
草觀世音の堂内に繪馬を納め。みづから寶珠を描き。その傍らに一  
首の狂歌を記しぬ

みがいたらみかいただけは光るなり



志やうね玉でもなんの玉でも  
さるに何者にや。程なく左の悪口をかい付けぬ  
みがいてもみがいただけは光るまじ  
こんな狂歌の志やうね玉では

### 暇まうして立田山

清水谷大納言實業卿。ある日常に睦じく語ふ中院通茂卿の許を訪ひ、  
四方山の風雅談に時を移しけるに。中院殿われ知らず欠びをしたり  
ければ。さては退屈して眠氣させしにやと推し。清水谷殿いざ退ら  
んとて

いざさらばいとま申して立田山

もみぢせぬ間に秋は來にけり

と戯れしに。中院殿まばしと推止め

秋の田のかりほの中にもほふ草

いねとはさちに思はざりけり

と返し歌詠まれき。

### 無常諸行の卒塔婆

或る寺の僧。卒塔婆に諸行無常と書くべきを。誤りて無常諸行と認  
め。更に心付かず。そが儘墓場に建置きしに。誰れやら其卒塔婆に  
無常とはいかなる人の諸行ぞや

そとば耻かし内にただあけ

と落書せしと云ふ。

### 白川樂翁侯の狂歌

樂翁侯未だ幼年にて。田安家に在せしとき。麻布島居坂戸川内膳の



屋敷より出火して、焼死人数多ありしかば、その時の落首に

この火事に人のいのちを鳥居坂

これよりうへの戸川内膳

と云へり、これをお附の醫師、疾に物語りけるに、身が詠めば左様

ではないと仰せらるゝ故、何と遊ばさるゝやと伺ひしに、言はぬ言

はぬと仰せらるゝを、達て伺へば

この火事は人のいのちを鳥居坂

怪我のことなら戸川内膳

とありしとぞ。

### 加保茶元成の狂歌

元成は吉原大文字屋市兵衛と云へる妓楼の主人なりとか、この男諸  
藝に通じ殊に古銭を愛し古瓦を好み、又松葉蘭に斑入を拵へる術に

妙を得て、文樓班と稱し、世の人の賞美したりと云ふ。元成ある時  
山口心牛が方に行きしに、心牛が手飼の狎、元成を見ていたく吠え  
ければ、元成とりあへず

加茂川のみづしらずなる我なれば

ちんが心にまかせざらまし

と詠みて戯れしに、心牛も直に筆執りて

ちん客を迎へまうしてかれもまた

飛びつくほどに思ふよろこび

と返歌せしと云ふ。

### 世の中の人と煙草

東海道日坂の人にて、粟枝亭鬼卵と云へる者、煙草を翫ぎて業と爲  
しけるが、その家の表障子に



世の中の人と煙草のよしあしは  
 けふりとなりて後にこそしれ  
 と書付けしを、樂翁侯通行のをり見給ひていたく賞し。御褒美を下  
 されしと云ふ。この歌は人の善く知る所なれども、打捨てがたくて  
 此處にもかく。

奎網點料を取らず

狂歌師元の奎網の許に、ある人狂歌の點を乞ふとて、懷紙にこがね  
 添へて贈りければ、奎網が返し文に  
 歳の暮に狂歌の點取の懷紙に添へて、こがね一步贈られけ  
 るに、いにしへの柯求と云へるもの。歌あつめける頃、板  
 の料とて錢を添へて贈りける人ありしを返すとて、  
 俳諧のてんやものならさもあらめ錢とは和歌の恨みなり

牛若の御子孫

けりと詠みて、つゝみ紙にかい付け返し侍りしときけば、  
 われもこがね返すとて  
 千金の春をとなり置くゆゑに  
 けふの一步はまづかへすなり  
 と認め送りけり。ふてその人の返歌に  
 かへされし一步始終の金言に  
 よみ歌ばかり二しゆぞおくれれる  
 狂歌の點料は今も取らぬもの多しと聞く。

狂歌の離縁狀を認めける。彼の紫檀樓古喜。ある日いつもの荷を脊  
 負ひて、八丁堀を通りけるに、さる密師の家と呼びこまれしが、少  
 女銀の女煙管を持來り。こは奥様のお持料なれば、町噂に善き羅宇



すげ替へ呉れよ。且つすげ替を拂ひ。又は息を吹返みてはならぬとの仰せなれば。左様心得てよと云ふ。古喜心におもふやう。おれを賤しきものと思ひて斯くは云ふなるべし。よし／＼おれに爲んやうありと。腰の矢立を取出し。一首の狂歌を認め。彼の煙管に添へて玄關へそと載置き。すげ替の料をも乞はず立去りしを。後にて取上げ見れば

牛若の御子孫なるか御新造の

われをむさしとあもひ給ふは

とありき。人々感じて扱ても風流の羅宇屋かなど。直に跡を追掛けて呼戻し。すげ替の料は素より外に許多のかづけものして。さて只今の返歌なりと女のさし出すを見れば  
辨慶と見しはひが目か脊負し荷に  
のこざりもありさい榎もあり

古喜この返しに耻入りて。あつく臆述べてかへりしと云ふ。

### 團十郎の仁木彈正

七代目市川團十郎ある時。仁木彈正の役を勤めしに。貞松本幸四郎の形に露違はざりければ。狂歌堂眞顔の詠みし歌に

だれやらにさてよくにつき團十郎

かうしろとてやをしへおきけん

とありしが。博識の聞え高き北慎言聞傳へて。尙ほいまだしとて

さてもよくしうとにつき團十郎

かうしろとてやをしへおきけん

と詠みなほせしと云ふ。

### 水火の責にあふ



狂言作者鶴屋南北。一歳龜戸村植木屋清五郎の隣家を借りて住ひぬ。さるに秋の出水にて。床をば一面に浸しければ。疊建具など片附け居たるに。いかいなしけん筋向ふの家より出火して。わが家根にも燃移りければ。村中擧つて寄集ひ。肥桶に水をはこび。肥柄杓にてまたし加そしぎ掛けしかば。その匂ひ鼻を衝きて最と堪へがたし。南北今歳はいかなる年にや。水火の責苦におひたりとて咬きしを聞き。七代目團十郎が贈りし狂歌に  
はなもちのならぬこやしを實入にて  
ことしもあたる作の出来秋

### 山崎宗鑑の一夜庵

宗鑑は佐々木の一族にして足利家の臣なり。支那彌三郎と云ひ。懐紙を鏡の引合せにかくして。月や宿らん尾花柄。天晴弓取の身なり

しが。世をはかなみて一休和尚の教を受け。山城國山崎に隠れて山崎の宗鑑と云ひぬ。草庵の柱に一首を題して客に示す  
上は来ず中はまばらく下は一日  
ひと夜とまるは下々の下の客  
されば人呼んで一夜庵と云へり。天文二年歳八十五にして歿す。その辭世に

宗鑑はどこへど人のとふならば  
ちと用ありてあの世へといへ

### こけのむす豆

豊太閤の御前に。青海苔を煎豆にかけたる菓子を出せしに。太閤見給ひて。傍らなる細川幽齋に向ひ。こは何といふものぞと問ひ給ひければ。幽齋取敢へず



君が代は千代に入千代にさしれ石の  
いはほどなりて苔のむす豆  
と答へたりとなん。

死後ののぞみ

曾呂利新左衛門、病重く頼みすくなく見えければ、太閤深くをしませ給ひ、死後の望み何なりと叶へ遣はすべし。遠慮なく申せと云ふ。曾呂利畏まりて

御威勢で三千世界手に入らば

極樂浄土われにたまはれ

大將はみなもとうじ

徳川家康、慶長十九年の冬、大阪城を攻しとき、日本中の軍兵大方

出陣して、落城は瞬く間とぞ見えける。家康の本陣は天王寺の茶臼山なりければ、何者にや

大將はみなもとうじの茶臼山

ひきまはされぬものゝふぞなき

と落首せしとぞ。

窓のむら竹

寛政の頃のことなりき。ある諸侯の狂歌好み給ひける人。朱樂管江の門に入りて、常に親しく召し語ひけるが、管江歿りたる後は、そりく其妻に贈物など遣はし、さて亡師の門弟中、狂歌巧に詠み得るものあらば召抱へたし。よきに計へ候へど申遣りぬ。妻の節松嫁々(管江妻の狂名)答へて、相尋ねて罷出すべきものあらば、此方より申上ぐべしといひぬ。さはあれど能く詠み得るものは、それぞ



れ家業ありて、相應に暮らす人々なれば、今更仕へを望まず、彼れ  
か是れかと考へしに、まだ管江の存生中、歳は三十路に足らぬ男、  
常に八百屋物荷ひて管江が許に來りけるが、其者家業柄には似ず、  
人柄も善く文綴る術さへ好みければ、やがて弟子の數に加へ、日を  
經るまゝに最と巧に物し、狂名を窓のむら竹とぞ云ひける。節松此  
者のことを思出し、試に彼れが心を探らばやと思ひし折柄、むら竹  
訪れければ、斯様のことあり、其許望みはなきかと尋ねけり、むら  
竹小躍して打喜び、何分よきにお世話下されたしと云ふ。節松申す  
やう、右のお屋敷はわれも今以て何かに付け、合力にあづかり  
大切のおん方なり、其許は得心にても、是れまで町家に住ひ、何に  
氣詰もなかりしに俄に大家に仕へ、妻子杯迷惑のこともありなん、  
よくく相談の上、返事せよと申しければ、こは御尤の仰せなり、  
子供はなけれど妻に諮りて、重ねて申上ぐべしとて、直に家に歸り

けるが、程なく再び來りて、妻も最とく嬉しがり、いかやう氣詰  
にても堪へ忍ぶべし、何卒お世話下されたしと申せしよし答へけれ  
ば、さればとて事の由を屋敷に申入れ、狂歌は巧に詠むものなれど  
も、身分はまかしくなりと有の儘にぞ申しける、殿はそれにても苦  
しからず、いざ召せと仰せけれども、家臣等相談手間取りて、久し  
くその沙汰なし、此方は必定整はぬなりと思ひ、むら竹に向ひ、折  
角ながら不首尾なりと思ふべしと云ひ遣りぬ、むら竹之を聞きて大  
に力を落し、まばしは商賣にも出ず、繼て風邪に罹りて打臥し、妻  
も力なく思ひ、かゝる賤しき身分なればこそ、福來れども有付かれ  
ざるなれど、二人くよく申居りしが、今日は少し心地善しと語ら  
ふ所に、上下扮装の侍、四五人の供人召連れ、あちこち尋ねる様子  
なり、こは長屋の奥の方に研師の住ふなれば、此處へこそ來りけめ  
と思ひて、隣の主人研屋御尋ねにもや、さらば此奥にて候と申しけ



るに、いやそれにはあらず。何某と申す八百屋を尋ね候と云ふ。むら竹聞付けて耳を引立て待居けるうち、わが方へ案内する氣配なれば、急ぎ起て四邊を片付け、先づ此方へと塵拂ふて通しけり。彼の侍申すやう、其許狂歌に名あるよし主人聞及ばれ、召抱へたしどの事なり。苦しからずば明日にも罷出られ候へと云ふ。むら竹申すやう、有りがたき仕合かな。さりながら見らるゝ通りの體なれば、貴人のおん前に出づべくもあらずと云ひければ、使者申すやう。それは苦しからずお受けの書附差出し候へと云ふ。いかゞ認むべきやと問へば、歌詠みて答へられよ。されど不快なれば文言好むべしと云ひつゝ、大小、上下、小袖、銀子等並立てはやお受けと申す。むら竹筆を執り、折柄風邪なりしかば

この君のめぐみを杖におきてみん  
風にふしたる窓のむら竹

として使者の前に差出す。使者もこの歌の最とめでたきよしを譽め稱へ、歸りて殿の前に差出し、終に三十人扶持給はりたりと云ふ。むら竹は青山久保町に住し、名を多田敏包といひ、千次郎と稱し。別號を青娥堂とも云ひぬ。管江門下の名高き人なり。一生の言行面白きことさはなれども、此處には省く。

からかさの催促

むかし八藤縫方といへる狂歌師ありけり。小雨そぼふる日、夜連の日中庵晝口といふものに、傘貸しあたへしに、日數程経れども返しおこさざりければ、それを催促すとて  
ぬるゝときかしたる傘のこゝろざし  
破らぬさきにはやかへせかし  
と云ひやりしに、日中庵の返歌に



一言もまをしひらきのなき故に  
口をすぼめてかへすからかさ  
とありしとぞ。

中根左太夫

むかし徳川幕府の直参の士に、中根左太夫といふものあり。物書く  
役を久しう怠りなく勤めたれども、一向轉役の沙汰なければとて  
筆とりてあたまかく役二十年

男なりやこそ中根左太夫

と詠みしを、いつしか上役の耳に入りて、遂に轉役したりと云ふ。

木室七左衛門

これも奮幕の頃、木室七左衛門と云ふもの、卯雲と號し、狂歌を能

くせり、久しう小普請方を勤め、年老いて天窓赤くなりたりとて  
いろ黒く頭の赤きわれなれば

番のかしらになりさうなもの

この歌、執政の列座にきこえ、聽て御廣敷番の頭になりしと云ふ。

おきつ白波

江戸八丁堀龜島町に、慈雲といへる禪僧住みけり、ある日慈雲用事  
ありて、庵室を留主にしけるに、小盗人忍び入り、法衣器具など殘  
らず盗み去れり、慈雲歸來りて、盗人の所爲なることを知ると雖も、  
色にも出さず、破れ襖一枚取遣しあるを見て、心ある盗人かな。わ  
れに寒さを凌げとてや、襖一枚取遣し置きしこそ殊勝なれとて

寒き夜はこれをおきつてふせよとや

襖ひとつをおきつしらなみ



### 石亭の辭世

と詠みしと云ふ。こは人のよく知る所なれども筆の序にかくなん。

石亭は通稱を木内重曉といふ。集古十種に近江國山田浦の隠士とあるは此人のことなり。平生奇石を好み、諸國よりくさく取寄せて娛みとす。その辭世を

大名駒屈公家貧乏坊主うそつき禰宜さみし  
阿耨多羅三藐三菩提の佛たち

なさしめたまへ金持の子に  
と云へり。面白き文句なりけり。

### 孫彦の滑稽

大屋孫彦は山玉の社人にして、本名を安井孫彦と云ふ。性來滑稽の

男なりければ、壯年の頃磁貝滄洲の門に在りて、折ふし人々寄集ひ苗字の對など附合せて遊びけるに、孫彦鳥居と云ひかけらるれば、直に魚住と答へ、鬼頭と出さるれば、神尾と答へ、その機智頓才人をして感服せしめたり。ある日、去る家に茶の湯に招かれしに、馳走よりは道具の方優りしとて

お道具は目に正月をさせまして

御馳走例の師走なりけり

又ある人、萩焼の茶碗を求めて、唐津なりと云ひければ

素人が黒人顔に目利して

萩をからつとあらそふ茶わん

### 狂歌の離縁狀

文政の頃、羅宇のすげ替を業とせし一奇人あり、號を紫担樓古喜と



よび、狂歌を能くしぬ。古喜妻と一人の小兒ありしが、妻は夫の狂歌に凝りて家業を顧みず。何事も打捨て遊びあるくを、憂きことに思ひ、ある日離別を乞ひしに、古喜直に語ひ、離別の状遣はすべしとて、筆執りて認めしを見れば

いかのぼり長き糸巻さり切らば

さぞや子供のみなきあかすらん

とありて離別の文言なければ、妻は呆れて物をも言はず打ながめて居りしに、古喜の友人尋ね來り、事の次第を聞きて雙方をなだめ、元の如く納めしと云ふ。

### 今一つ離縁状

右の話に最と善く似通ひたるは、某と云へる狂歌の好き人、妻に一人の小兒ありて、さのみ貧しきにはあらねど、日頃狂歌にのみ心を

奪はれ、家を修むること拙かりければ、行末覺束なしとて、其妻離別を乞ひしに、某は最と容易きことなりと筆を執りて

女房をさつた時の親しらず

子しらずとなる内はあら海

と書き妻に與へけるに、折善く知人來りて二人を説きなだめ、これも丸く納めしと云ふ。

### 實境と非實境

或る禪僧の俳諧は知らざれども、詩歌少し心得たる者、一歳上總の國に行脚して、何とやら云ふ所の在家に杖を留め、松の内は爲すこととてもなく、近き邊の小兒等の遊べるを友としてありけるが、歳の程十にも足らぬ童子、發句したりとて

梅の花紙鷲が加はると志かられる



と吟じ出しぬ。花の咲くを見ては世を樂み、葉の落つるを見ては世をはかなむる。常の心の物に觸れて催す情なれば、梅を見て紙鸞を思ひ、枝に懸りて叱らるゝを思出すも、一つ情なりと感心して、取敢ず扇を與へて賞美しければ、悦びて打群れながら何處ともなく去りぬ。暫くして又群寄り來りしが、是れも丁度同じ歳頃の童子にて吾も一句したりとて

初春の門やたちまふ御萬歳

と吟じ出す。傍らより十二三の童子、夫れは何某殿の句なりと云ひ争ひて又去りぬ。その後四五日經て、禪僧は或る醫師の許を訪ひ、此事を物語りしに、醫師は微笑みつゝ、後の句は我等が歳旦の句にて

松竹の門や羽をのす鶴太夫

と云へるなり。さるを何者か焼直して教へたるにやあらん。彼の句

は初春の五文字に姿なし。松竹なれば門飾の姿繪にもうつり、鶴太夫とありて萬歳の立舞ふ袖の風姿見え侍るべきを、未熟なる者共の姿を知らず、狼に直しけるよと打笑ひぬ。禪僧は後に人に語りて、我等俳句を知らざれば可否を別たんやうなけれど、唯始めの梅の句はやさしく思ひたりと云へりとぞ。いづれ句の善きにはあらざれども、實境實情より得たるを否らざるとは自から別あるものと見ゆ。

翌よりけふの櫻

陸奥の二本松にて俳諧好む人々、櫻が下に酒汲みかはし遊び居たるに、土地の百姓の出來りて、我れにも酒飲し給へと云ふ。發句致し申されなば如何にと戯れしに、その男暫し案じて

きのふより翌よりけふの櫻哉

と云ひぬ。此句にみなく興醒めて、一句も頼には出でざりしと云



叱つた瓜

平生は風流の心なき人にて、物の善き悪しきに感じて、思はず秀逸の句を出すことあり。遠江の國に或る人の子を失ひて、一周忌になりしとき

去年まで叱つた瓜を手向けり  
感慨無量の句を詠み出でしと、大江丸が書きたる物の本に見えたり。

萩寺の和尚

文化の頃なりとか、奥平大膳太夫殿尚ほ幼少にて、或る日本所邊へ遊山に出られしをり、彼の萩寺にて休息せられけるに、住僧厚くも

てなしければ、家臣某住僧に禮を述べ目録を遣はしぬ。住僧忝なくおし戴きて開き見しに、僅に百疋なり。これは餘りにあたじけなしと直に筆を執りて、一首の狂歌を短冊に認め、若君に御禮のためとて目通りのをり、愚僧一首のえせ歌をつらぬ候とて、直々にお手許に出しけり。奥平殿幼少のこと故、一覽も爲されず。その儘懐中して歸館の後、萩寺の和尚が斯様のもを呉れたりとて、お側向の家臣に渡されしを見れば

大膳が太夫くれると思ひしに  
たつた百疋おくだいらさま

とありければ、若君大に笑はせ給ひ、何者のはからひにや。詮議すべしと仰せありて、その事を取計ひたる某は、お目玉を頂戴し、萩寺へは使者にて、更に銀五枚を贈られたりとなり。



其律の辭世

其律は松尾流の茶人にて。俗稱を久野與四郎と云ひ。又助九郎とも久左衛門とも呼びぬ。油煙齋の門に入りて狂歌を能くし。狂名を永日庵と云ふ。辭世の歌に

魂飛んでいづれへ去ると尋ねたら

おらもしらぬでことはすむなり

辻君登勢

江戸鮫が橋に。辻君とせと云へる者あり。身は賤しき女なれども筆才ありて。或るとき作りたる歌に

田毎ある中にもつらき辻君の

顔さらしなのうんの月かけ

人を咀へば穴二つ

むかし麻布しろ山の稻荷の神木に。何者の仕業にや人の形を描きて其眼に釘を打込みありしかば。そを取捨るとして。宮奴の小鍋のみさうづが

目をかきてのろは鼻の穴二つ

耳でなければきくこともなし

と認め。その木に張付け置きしに。次ぎの夜は耳を描きて。同じく釘を打込みありしかば。またく取捨つるとして。智恵の内子が

目を耳にかへすくもうつ釘の

つんぼう程もなほきかぬなり

斯く認めて再び張付け置きぬ。さるに三四日過ぎて。此度は葉人形を造り。釘をまたくか打て。社の前に立置きければ。元空網が



いなり山きかぬいのりにうつ釘も  
ぬかにゆかりのわらの人形  
と認め置きしに。その後遂に止めたりと云ふ。

### 三津五郎の考歌

四代目坂東三津五郎。初めの名を箕助と云ひ。その後秀調と改め。俳名を是好と稱す。至て風流なる男にして。面白き俳句狂歌などくさくあり。或るとき詠みける霜の歌に

八萬三千八三六四三三九一八二

四五十二四六四億四百

又桃の歌に

五二七九二八二九九百七九三三四

九六三三四八八七十三千四百

才智の程、役者には最と珍らしとて。其頃人々持囃しけるとなん。

### 六樹園飯盛

雅言集覽の著者六樹園飯盛は。江戸靈巖島に住して名高き博識なり。一歳京都より名ある歌人。或るやんごとなき館に下り。人々寄集ひて和歌の會を催しけるが。席上にて彼の歌人。今東都にて和學に秀でたらんものは。何人にやと問ひければ。館の殿そは石川雅望と申す者にといまり候と答ふ。彼の歌人。重ねてさらば唐土の雜書に通じたるものは。何者にやと問ひければ。側の人そは五老山人に越すものなしと答ふ。歌人。更に東都には六樹園と云へる狂歌師ありて弟子三千に餘ると聞きしが。實にさる者あるにやと問ふ。末座の或る人。その石川雅望と云へるは。六樹園がことにて。六樹園は五老先生と同じ人なりと云ふ。彼の歌人大に驚き都のつとに。其人の書



きし物求めたしと申しければ、殿は早速使者を飯盛方に遣はしぬ。  
飯盛廳で二ひらの短冊に

鶴とかはづがうたふ聲きけば

ひるの長うた夜のみじかうた

たけのこをほらんとせしを秋まで

のばしてつゑにきるも孝行

と書きて贈りたりと云ふ。

### 茄子の茶入

田中真宗と云へるもの、茄子の茶入を所持してまたなきものと愛翫し。人に向ひて我は茄子の茶入を持てりなど、誇顔に云ひければ、  
或る人片復痛く思ひて

二服さへいらぬ茶入のなまなすび

あへてその身のかほよごしかな  
と詠めりとぞ。

### ト養の昇進

半井ト養、或る年の十二月法眼になりしかば

ありがたし古装束をせんたくの

のりのまなこと春は來にけり

となり。

### 桶どぢの風流

むかし去る所に住みける。何某と云へる桶職人、由緒ある人の果に  
やありけん、家貧しけれども心に掛けず。或は仕官など勸むるもの  
あるも、富貴を願はずとて辭して従はず。曾て我が子に教ふるるとて



文化四年或る人、長崎より波斯國産の駱駝二頭持來りて、八月九日より兩國廣小路にて見世物とす。この時加茂季鷹の詠みし歌に  
くびは鶴脊中は龜の甲に似て

駱駝と唐人踊

はめ。さてく御羨ましきことに候と云ひければ、隨軒喜悅の眉を開き。如何さま不肖の吾等天龍を得て、爲さんと思ふこと成らざるはなし。若し算考違はずんば、鴻業の成らんこと掌中にあり。料紙を貸し給へとて何やら書付け。こは拙者が寸志なり。尙ほ重ねて御禮に參るべしとて出行きたり。卜者は喜びて獨り打笑みつゝ取上げ見れば、一物もなく唯一首の狂歌あり  
二百をば禮と祝儀にまゐらせん  
八十年はこちへのこして

木に竹のむりは云ふとも底が親  
いはせて桶やたがわらふとも  
と詠みて興へしと云ふ。

河村隨軒の夢

河村隨軒。或る夜二百八十と云へる夢を見たり。覺めて後此數何に當れるやと。頻に考ふれども思ひ出さず。折節天王寺邊を通りけるに。見通し夢判斷と記したる看板を懸けし家あり。是れ幸ひと内に入り。吾は河村隨軒と申すものなり。昨夜二百八十と云へる夢を見たれども。何の數とも得知らず。氣掛りなればよしなに判じ呉れよと云ふ。卜者領きて。筮竹など打振りて暫く考へ。謹んで御夢を占ひ候に。御身はまことに多福圓滿の相におはせり。此上の望みは壽命にて候べし。昨夜見られし夢の數は。取りも直さず壽命にこそ候



千秋らくだばんせいらくだ  
とありたり。其後三十二銅にて見せければ、村田了阿が歌に

あしあふて見るより見ぬがらくだらふ  
百のおあしが三つにをれては

とあり。又文政五年に、葺屋町河岸に唐人踊と云へる見世物出き。  
この踊は一名をかんく踊と云へり。蜀山人の歌に

かんくど照る日にそだつひる顔の

つるつてとんと庭をはふく

かんくの氷も今朝はとけそめて

きはきて匂ふまどの梅が香

### 袖のなみだ

和調亭未永と云へる狂歌師。或る冬の寒き日に、酒買ふて飲まんと

思へども、囊中一錢の貯蓄もなかりしかば、早速近邊の質屋に行き  
て、唯今急用あり質物は後刻必ず持來るべし。金少し貸し給はずや  
と云ふ。質屋の主人は、かねく未永と懇意の間柄なれば、言ふが  
儘に貸し與へぬ。未永大に喜び家に歸りて、酒肴未めて獨り樂む折  
柄、質屋の小者入來りて、質物は如何し給ひしと責むるにぞ。未永  
やがて一片の紙に、歌書きて持せ遣りける。その歌に

質草はみなかれはてゝおく物は

袖のなみだの露ばかりなり

とあり。主人哀れに思ひて、更に黄金三片與へたりと云ふ。

### 靈岩寺の鐘

寛保二年の春、靈岩寺の方丈と所化と紛議を生じて、公事沙汰とな  
りけれども、もとく方丈と所化とのこと故、師弟は親子の如く。



子として親を訴へるは道に違へりとして、所化五十八人江戸改易に處せられたり。折柄如何なる故にや。寺の鐘破れしかば、或る人の落首に

鐘われて諸行無常の聲もなし

方丈めつはふ所化は滅寂

### 東甫の多借

東甫は名古屋の人にて、通稱を内藤正參と云ひ、閑水と號す。仕を辭して後泥江隠士とあらため、狩野派の畫を能くせり。性來物に拘はらぬ達なれば、暮向きのことには一切構はず。されば借錢多く。或る歳の盆に債鬼に責められ詠める歌に

うか／＼と心もそらになりけり

外はぼん天内はたいしやく

梵を盆に云ひかけ、帝釋を大借に云ひかけたる最とをかし。

### 二居士の述懐

石井九郎右衛門と云へる人、狂名を二居士と云ひ、狂文狂歌を能くし。又茶事に通ず。秀才なるが爲めに却て身に障ること多く、御祐筆御書院番に轉じ、同組領に昇るべきを、組頭格に仰付けられければ、心樂まず。その時詠める歌に

かくといふ病にふつと取つかれ

とても喰はれぬお足高米

重役高木某、これを聞いていろ／＼執成しければ、程經て五十石のお足高米を賜りしと云ふ。

### 行脚宗興



行脚宗興は、何處の人と云ふことを知らず。或るとき行きくして陸奥の成瀬川の邊に至り病んで没しぬ。没したる折その枕の下に一片の短冊ありけり。里人等遺骸を近きほとりに葬りて、紀念の石を立て。そが上に左の歌をばほり付けぬ  
とても身の旅路にきえてまほ籠の  
浦のあたりのけふりともなれ

祖曉禪師

甲州の祖曉禪師。手づから雪を取りて雪佛を造り。そを笠の蓋の上に置きて、一首の歌を詠じぬ  
南無佛やこれも歸依佛無上尊

あつる雪は阿耨たらく  
折柄來合せたる徒弟等に向ひ。歌の意を説き聞かせけるとなり。

花笠魯助

魯助は越後高田藩の侍醫伊東某の男にして。近世の碩儒東條琴臺の實兄なり。幼時より醫業を嫌ひて家を出で諸國を漂泊ひ。遂に江戸に來りて狂言作者鶴屋南北が。未だ勝俵藏と云ひし頃。その門に入りて花笠魯助と稱し淺草茅町に住せしが。平素分に過ぎたる奢侈を極め。遂に許多の不儀理など出來て。實弟琴臺よりも義絶せられ。其後安政の大地震に逢ひて茅町の家をも失ひ。父子四人。葛飾郡須田村の農家の馬小屋を借受け。辛じて雨露を凌ぎしと云ふ。そのをりの狂歌に

小遣ひのありやなしやも月花に

いざことかゝぬ隅田のかり住

物に拘はらぬさま。歌の上に明かなるべし。



朱樂管江

執着の心や娑婆にのこるらん

吉野のさくらさらしな月

と云へる管江が辭世の碑は、向嶋の三園社内と關口の芭蕉庵とに建  
てあること、人の疾く知る所なり、蜀山人或る日芭蕉庵に至りて詠  
みし歌に

志う着の心が娑婆にのこるなら

二度とは口をあけら管江

とありしとぞ。

師匠からお詫

七代目市川海老藏の弟子成田屋宗三郎は、後に赤猿と云ひ、とんぼ

の大名人なり。或る歳師匠の前を失策りてくびにされしが、その後  
海老藏木場男之助を勤めしに。如何にしても鼠が氣が入らず。急に  
赤猿を思出し呼返へさうとすれども、赤猿なか／＼承知せず。海老  
藏閉口して到頭あべこべに師匠から詫を入れ、勘當を免したりとは  
おもしろし。

赤べたの役者

七代目市川海老藏は、平生風流なることを好み、俳句狂歌など巧に  
物しぬ。或るとき梅花、黒猿等と一座にて、芭蕉の「道ばたの權花は  
馬に喰れけりの句を一つもちりしとて。海老藏まづ

道ばたの眞瓜は馬に喰はれけり

と吟じたるに、梅花これを聞て手前も一つとて

道端のお公家は馬に乗られけり



と云ひぬ、その時黒猿も躍起となり手前もどて赤べたの役者は馬に成られけり  
と作りぬ。海老藏この歌を事の外感心して褒美など與へしと云ふ。

### 自個は頼光だ

今の尾上菊五郎嘗て土蜘蛛を演ぜしとき、作者の篠田某家橋の部屋に入來り、「親方貴方頼光を爲さるのですかと尋ねしに、家橋頭を振り「いや頼光は誰れが爲るか知らない。自個は頼光の方だと答へしにぞ。篠田不思議相に「さうですか私は貴方だと計り思て居ましたと云ひ、その足にて直ぐ音羽屋方に至り、「親方家橋さんが頼光を爲ると思ひましたに、自個は頼光の方だと仰有いますか。さうすると頼光は何方が爲さるのですと眞面目で言ひたるには、流石の音羽屋も腹を抱へて笑ひしとぞ。

### 何うも蛇が怖い

今の芝翫は一風ある男にて面白き話も澤なるが、先年京都よりの歸路、三州豊橋にて興行せしに、乗込のとき出方一同と、人力車にて威勢善く芝居の前まで來りしが、入口に車を下していつかな遣入らず「この芝居なら出勤はお断りだと言ひ出したれば、一同大に驚き何が氣に喰ないで厭氣になりましたか。今更そんな事を仰有つては芝居一同迷惑しますと、福助初め歌女之丞梅助など左右より其譯を問へば、芝翫は櫓を指し「自個が前方この芝居へ乗込んだとき、天井に蛇が居て吃驚した事があつた。今もその蛇が居れば何んなに大きく成て居るか知れない。それだから何うも怖つて出勤は出來ぬと云ふ「親方それは何時頃の事ですと問へば、芝翫は暫く考へ「さうさそれは四十年程前の事だと云ひしに、一同思はず吹出し「親方そ



れなら大丈夫。この芝居は四五年前新規に建てたのですから。蛇は居ませんと堅く請合ひ。やうく安心して手打を爲せしと云ふ。

べらぼう判官

故の尾上菊五郎。或る歳弟子梅五郎等を引連れて、田舎廻りを爲せしをり梅五郎『忠臣蔵』の鹽谷判官を勤め、腹切の場にて間違て、九寸五分を左の手に持ちたるまゝ俯伏に爲る。師匠の菊五郎由良之助にてこの状を見。九寸五分を持替ると云ふ。梅五郎死んだ判官が刀を持替へる道理は無いから。さうは出来ぬと云ふ。例の菊五郎憤然となりて何でも善いから持替ろつてば持替る。この籠棒判官めと小言を言はれ。梅五郎口惜つて天窓の上からのきんと差出しければ菊五郎火のやうに立腹し。うぬこの野郎と判官を捕へ。舞臺をも構はず力に任せて三つ四つぶん擲りしかば。見物總立と爲り。其日は

到頭幕を引きしと云ふ。

寝て仕舞とは無禮

成駒屋歌右衛門が従男に伊助と云へる者。將基が上手にて素人初段の評あり。成駒屋も將基は強けれども。負際になるとちよいと待てよと云ひながら。煙管をくはへて考へ出し。事に寄ると一時半も掛かることあり。伊助これには閉口せしが。或る時例の如く考へ込まれ。小便是支へる。足は麻痺れる。堪らなくなりしかば親方御免と駈出す拍子に。成駒屋が秘藏の蘭を蹴飛ばし。その上臺所へ行きたる儘。ふんぞり返り寝て仕舞ひぬ。とも知らぬ成駒屋は頻に考へて漸く妙手を思付き。伊助くと呼びしも一向返事なく疾に寐て居るにぞ。怒の眼くわつと見開き。己れ主人と勝負を争ひながら。中途にて寐ちまうとは無禮な奴。その罰として今夜は夜通し差すからさ



う思へど無理に引立てられ、伊助餘儀なく相伴せしが、をりくは  
自個は何故將基を差すのだらう。將基さへ知らなければ、こんな苦  
しみは有るまいにと、泣かぬ計りにこぼせしどは可笑し。

賣詞に買詞

天明の頃、狂歌さかんに行はれておの／＼可笑しき狂名を用ゐけれ  
ば、或る人狂名のみ如何にかしとて、狂歌を可笑しくえ詠まざら  
んには、詮なきことなりなど云ひて、當時の狂歌よむ人をば嘲りて  
子々孫彦の許に

くそ船のはなもちならぬ狂歌師も

葛西みやげの名ばかりにして

と云ひこしければ、孫彦の返し

葛西菜の賣ことこの葉に買ことば

くそをくらへどさらば云はなん

やどの女房

塵外樓清澄酒を好み、壯年の頃は狹斜の巷に遊びありきて、家にあ  
ること稀れなりければ、妻はこれを心憂く思ひ、折に觸れて諫むる  
ことあれども、唯うるさしとのみにて更に聞入れず。妻に示したる  
歌に

さいといふ名のあればにや夜遊びを

四の五のと云ふ宿の女房

光とほととぎす

桑楊庵つふり光は、狂歌の四天王と稱へられしその一人にて、一生  
の秀吟擧げて數へがたし。性としてほととぎすを好みければにや。



まづ「ほとゝぎす自由自在に聞く里はと云へるを初め、辭世の歌ま  
で時鳥なるを見ても、この鳥にかゝはる歌の多きを知るべし。光あ  
る歳の卯月初めつ方、祝ひごとにてさる家に招かれ、心地善く酔ひ  
て家に歸り、その儘寐入りけるに、酒氣を暮ひてや、蚊三ツ四ツ飛  
び來りていたく螫しけるにぞ、あなうるさしと起上りて蚊帳を釣ら  
んど、柱に釘など打付けし折しも、一聲高く空にほとゝぎすの鳴渡  
りければ

ほとゝぎす待夜に蚊やをつりそめて

はしらの釘の志かときいたり

その頃隣家に住みしあるじは、光の社中にて常に狂歌を詠むものな  
るが、先程よりの物音を聞きて、光の家の壁をほとゝぎすと叩き

かな槌のおとなりゆるに起されて

壁にもみゝのほとゝぎすきく

と詠みしとなん。

### かなしさはますばかり

文化の頃、六樹園の社中に門田稻葉といへる人あり、初め齋藤彦麿  
に學び、後に六樹園に従ひて狂歌を能くしぬ。歿後男の桂亭照秋、  
父の爲めに追福の狂歌會を催し、秋無常と云へる題にてよみし歌に

かなしさはますばかりなりつきそひし

親に別れてのこるこいめは

### 此世のいとまごひ

本町側の棟梁梅の屋鶴壽は、近代の名家と稱せられし人なり、老後  
抹翁と改む。そは天神記より思付きて鶴壽と云ひし故、抹翁と對せ  
しなりとぞ。晩年中氣といふ病にかゝり、柳原のほとりの往來にて



俄に病死したり。其折懐中せし一葉の短冊に

つまづくか最後このよのいとまごひ

ひまゆく駒のおくり狼

### 花咲庵末守の辭世

花咲庵俵米守は、通稱を龍澤勘兵衛と云ひ、臥龍園の社中にてその

名世に聞えぬ辭世の歌に

子のために苦勞する親をやの爲め

苦勞する子に今ぞわかるゝ

### 和泉式部の開帳

いつの頃にかありけん。和泉式部の寺に開帳ありしとき。ある人樋口關月を誘ひて共に詣でんと云ひしに。關月さはることありとて斷

り云ふ序に

無遠慮に男はどうも行かれまじ

和泉式部の開帳には

その人腹を抱へて笑ひけるとぞ。

### 菊五郎は自個ばかり

難波の太夫中村富十郎の弟子に、中村菊五郎と云へる役者ありけり梅幸上坂の砌。大に立腹して日本に菊五郎と名告るは自個ばかりなり。端役者の分際にて菊五郎など云へるは勿躰なしと。富十郎に申込みやがて改名させしと云ふ。

### 名高きあだな

むかし役者の中には、綽名の方世に聞え。まことの名は隠れたるも



の多し、團藏の弟子三藏は狸の三藏、多見藏の弟子の章魚藏、三藏の弟子の狸の新藏、又壽美之丞の弟子壽美世をば女狸など云ひし類是れなり。

### 男之助の二本隈

おかし男之助の顔は赤面に作るを例としぬ。さるに八代目團十郎初めて二本隈を用ゐしかば、當時在坂中の七代目大に立腹して小言を申し送りぬ。今の團十郎も二本隈にしたりと云ふ。

### 私抱への役者なり

徳川家のころ關東筋には、八州と云へる役人頗る權力を有し、芝居事は公然出來ざることなりしかば、芝居師はいろくさまくくに工風して、窃に興行するを常とせり。ある歳岩井衆三郎初め名高き役

者共、上州桐生に買れ行きしに、三日目に至りてその筋の手が還入り。役者一同縛められて、江戸送りとなりたり。町奉行早速中村勘三郎を呼出し、この役者共は皆其方抱への役者か如何にと尋ねぬ。もし抱へにあらざと言へば、残らず入牢となる故勘三郎氣毒に思ひ一同私抱へに相違なきよし答へしかば、お叱りのみにて事濟み。勘三郎一座の人々を引取りて歸りしとぞ。

### 千金齋春芳

千金齋春芳は、六樹園の社中にて烟管職なり。さればその業に因みて真中條春芳とも云ひぬ。辭世に

そろばんの九九の數ほどいきのびて

極樂へゆく勘定もよし

八十一歳にて歿せしかば、斯くはよみしなるべし



無常の風

平秩東作、妻のみまかりしとき

吹くからに山の神さへまなぬれば

無常の風をあらしといふらん

うちは野となれ山櫻

朱樂管江の妻、狂名を節松嫁々云ふ。その學才管江の下に立たん  
ことかたしとかや、管江常に月花にうかれありきて旅寐がちなりけ  
れば、ある時節松のよみし歌に

よしやまたうちは野となれ山櫻

ちらずばぬにもかへらざらん。

梅がかばやき

朱樂管江、ある時親しく行通ふ人の許に、梅の花を見に行きけり。

そこのあるじ手づからうなぎ焼きて、厚くもてなしければ

目の前で手づからさくやこの花に

匂ふうなぎの梅がかばやき

式亭三馬の辭世

世に本町庵三馬が辭世の歌を

善もせず悪もつくらず死ぬる身は

地藏もほめずえんましからず

なりと云ふものあれども、こはさる醫師の歌にて三馬に揮毫せさせ  
碑をば柳島妙見の境内に建てしなりと云ふ。いづれか眞なるや知ら  
ず、今はこの碑、柳島になし。いかになりしか。これもまらず。

手柄岡持の辭世



手柄岡持は秋田侯の家臣にして、平澤平格と稱し、明誠堂と號す。  
文化十年五月没せり。辭世に  
狂歌よむ内は手柄の岡持よ  
よまぬだんでは日柄のほたもち

後奈良院御製

むかし石間の阿彌陀堂。荒れはてたるよしを敬聞ありて。後奈良院  
のかしこくも詠じ給ひける歌

堂あれて雨のもりやとなりけり

佛のあだをいざやふせがん

その後屋根の葺替成りければ。光廣卿とりあへず

今こそは極樂ならめあみだ堂

雨のもりやをいたくふせぎて

忝けなさが身に餘る

ある時細川幽齋。豊太閤より吳服を給はりしに。小袖のたけ殊に長  
かりければ

下さるゝ小袖のたけの長ければ

かたじけなさは身にぞあまれる

芝翫と幸治の將棊

今の成駒屋芝翫は。將棊が大の好きなれども。至て下手なり。作者  
の竹柴幸治も亦同様。好き下手の方なれば。兩人が勝負を争ふさま  
は。實に可笑しく見て居られず。初めはいつも芝翫が待つた無し  
規則を破り。繼いで幸治も破るに。その破方一種不思議にして。五  
手も六手も跡戻をする故。後には双方ともわからなくなり。明白と



勝負の決したる例は、嘗てなかりしと云ふ。

### 江戸の湯は恐るべし

大坂役者坂東荒太郎は、その名の如く意地わるき性にて。一座のものの大概思み嫌ひぬ。一歳江戸に下りしとき、江戸の洗湯も大坂と同じく、中段のあることと思ひていきなり飛込み、その儘沈みて大騒ぎを爲し人に引上げられしも、之が爲め逆上して嘔吐を催し。さてさて江戸の湯は恐きものなりとて、その後洗湯へは行かざりしと云ふ。この男強情者なりしも菊五郎に逢ふては一言半句もなかりしとぞ。當時菊五郎の勢ひ甚だ強かりしを知るべし。

### 奇妙なる藝名

七代目團十郎は、弟子に奇妙なる名を付けることを好み、己が俳名

の白猿と云ひしに因みて、升五郎を黒猿、宗三郎を赤猿、團八を青猿、箱虎を箱猿など呼ばせぬ。その外吉左右、團内など付けたるも可笑しく、又上州伊香保邊の生れにて、弟子となりし男に、湯場造と付けたるも最と可笑し。

### 鯛をむらさきと云ふ事

婦人の言葉に、鯛を「ちむら」又は「紫」といふことあり。こはむかし紫式部鯛をたうべけるをり。夫の右衛門佐宣孝外より歸り來りて、あらぬものをたうべぬものかなと笑ひければ、式部が日の本にはやらせたまふいし水まゐらぬ人はあらじと思ふと詠みしに基けるとなり。

### 蜀山人と穴守との贈答



あるとき蜀山人、門下なる臍穴守に向ひて

咄臍の穴より禪師物とはん

そも三寸の志たは如何と

穴守の返歌に

隠すべき臍の穴守見つけられ

舌三寸のまをしわけなし

### 桃水和尚

桃水和尚は名高き僧なりき。一歳大津に來りて沓を造りてひさぎ居りしに。或る人大津繪のあみだの像を興へければ。之を壁上に懸けおき。左の歌をばそが上にかいつけぬ

せまけれど宿をかすぞよ阿彌陀殿

後生たのむとおぼしめすなよ

### 豆腐と石

天明の頃松平康福。將軍家御名代として朝疾く上野に赴きぬる途中町家より山内に豆腐を持ち行くものあり。その男豆腐をば桶に入れ片荷に石をかけ。さて天秤棒にて荷ひ行きけり。康福惣籠のなかより見て。あれは何なりやと尋ねけるに。惣籠脇の士志かゝの由答へければ。やがて左の歌をばものして。歸邸の後近臣に示されたりとなり

世を荷ふころは廣しあめが下

豆腐に石もどきの釣合

### 曉月坊

曉月坊名を爲守といふ。定家卿の孫にして爲家卿の子なり。母は安



嘉門院の四條といひ、後に阿佛尼と稱して十六夜日記を著したる女なり。或る日この曉月坊に向ひ。其許の歌は家柄に似ず。あまりに卑俗なりといふものありしかば。曉月坊とりあへず

曉月に毛のむくくとはへよかし

さる歌よみと人はいはなん

と詠みにき。その人いふ所を知らず赤面して歸りしと云ふ。

### 宗祇の髭

宗祇は種玉庵といふ。諸國行脚のをり或る山中にて小賊に出會ひけるに。その賊宗祇の衣類金銭には目もとめず。美しき類髭を切取らんとせしかば。宗祇驚きてこれを止め

わがためにはしきの髭はゆるせかし

塵のうき世を捨てはつるまで

### 宮川禪尼

宮川禪尼は細川幽齋の姉にして雄長の母なり。京の建仁寺塔中如是院に住して。浮世の外に行ひすましけるが。ある時甥の長岡越前守より使者來りて。大津まで米百石送りたるよし申しければ。その返事に

ごふしんの役にもたぬこの尼が

百の石をばいかでひくべき

とありしかば。げに理りなりとて牛車もて運び送られしと云ふ。又ある時雄長頭痛を病みて。十津川に湯治にゆきしが。そのをり禪尼より

養生の湯入のころまづかなれや

とつかはとこそあがり給ひぞ



とよみておくりしと云ふ。

### 飯盛と眞顔

六樹園飯盛、狂歌堂眞顔共に名高き門人数百名ありて、いづれも最  
と盛なりければ、兩雄並ひ立たずの譬喩のごとく、弟子達の師匠最  
負より遂にその中おだやかならずなりて、年久しう音信をさへ断ち  
たるを、蜀山人中に入りて和解を圖りけるに、素より宿意ありて不  
和を生じたるにあらねば、忽ち打釋けて堺町中村座にて和解の宴を  
開きぬ。この時狂言は和合太平記にて、大切は戻駕籠なりけり。蜀  
山人まづ筆をとりて

今年和合太平記

六樹狂歌會一同

とまるされければ、飯盛、眞顔も直に

ことしまで無言の幕ひき返し

飯 盛

相合駕籠の棒組にせん  
膝とひざよき中村の顔見世や

眞 顔

### 唐來三和

唐來三和は土の家に生れしが、放逸にして家をかへりみず。本所松  
井町なる妓院に入夫となり、和泉屋源藏と云ふ。蜀山人の門に入り  
て初めて詠みし歌に

師の縁を結んで口をどく若に

ごまん才子のわれも數かは

### うしと見し年

蜀山人は性として酒を嗜み、すこやかなる人なりしが、文政元寅年



二月十八日。登營の道すがら神田橋内にて躓きまろびしより、身軀元のごとくならず籠りがちにくらしけるが、文政四年に至り過ぎとし方を思ひいでて左の如く物しぬ

ながらへば寅卯辰巳や志のばれん

うしと見し年今はこひしき

命はつきの船

渡海里花成とよべる狂歌師。ある時西國筋に行くとして船に乗込みしに、何とやら云ふ沖にて俄にはやてに遇ひ、船已に覆らんさまなりしかば、乗合の人々生きたる心地なく、神佛のみ名など唱へて一心不乱に祈りけり。花成も今はこれまでなりと感念して

夢のうき世今ぞ命は月の船

真帆にぞ西へのりの道かな

の辭世を詠みて死を待ちしに、不思議にも風凧きて恙なく心ざす方に着きにき、程なく江戸に歸りしかば、親しき友なる紀定丸がよみし歌に

災難にかゝる辭世の歌までも

よみがへりたる君といははん

おかちかちく

むかし黒田侯の屋敷にて、日々暮六ツの拍子木を、足輕共の打廻りけるを、毎夕殿の聞きたまひて、彼の拍子木いま暫く控へよくと止めたまひしとぞ。こは諸人門限遅刻して、難儀のかゝるを厭はせたまへる。ありがたき思召より、かくよひ止めたまふなるよし。さるに足輕共は、殿の思召のほどもかへりみず、六ツ廻りをはげしく廻りければ、遂に足輕の六ツ廻りを廢し、徒士何某といふものに。



この役を命じたまひ。ゆるやかに打廻るべきよし仰付けらる。何某は思寄らざる格式もなき役を命ぜられしかば。打詫びてかくもなき丸拍子木をわたされて  
あかちかちく夜廻りぞする  
と物しぬ。殿聞きたまひて。また元の役に復せられしとぞ。

横井也有的狂歌

横井也有は、尾州侯の家臣にして、俳諧に名あり。通稱を孫左衛門といふ。世の老人の爲めに狂歌七首を詠みたり  
皺がよるほくろが出来る脊がかいむ  
あたまがはげる毛が白くなる

「是れ人の見ぐるしきを知るべし  
手はふるふ足はよろつく齒はぬける

耳はきこえず目はうとくなる

「是れ人の數ならぬを知るべし  
またしてもあなじはなしに孫自慢  
達者自慢にふるき洒落いふ

「是れ人の片腹いたきを知るべし  
くどうなる氣短になる愚痴になる  
思ひつくことみなふるくなる

「是れ人のあざけるを知るべし  
身にそふは頭巾えりまきつゑ目鏡  
湯婆温石に毛ゆびんまごの手

「是れ人のかゝる身の上を知らずして  
聞たがる死にもながるさびしがる  
出しゃはりたがる世話焼たがる



「是れをつねに妾見として、老ひたる程をかへりみたしなみてよろし。されば何をゆるすと  
いへば

宵寐朝寐ひる寐ものぐさ物わすれ

それこそよけれ世に立ぬ身は

### 蜀山人と千蔭

蜀山人曾つて契冲阿闍梨が、圓珠庵に手づから植置かれしといふ。楓樹の根を分ちて、わが園中にうつし植ゑたりしに、ある歳の秋紅葉したりければ、一枝折りて加藤千蔭が許へ贈るとて

ならの葉の時雨にそめしもみぢ葉を

君ならずして誰か見るべき

といひやりければ、千蔭の返歌に

かげたかき名にはきこえし一枝を

君ならずして誰か見すべき

とありけり。蜀山人は和歌をもをかしう詠みしと覺し。

### 都は歌どころ

蜀山人曾つて京都へ登りけるとき、名所古跡を探り見んとて、五條の橋にさしかかりけるに、橋板の腐れ朽ちたる所を、小板もて剝ぎつくるひありければ、やがて

来て見ればさすが都は歌どころ

橋のうへにも色紙短冊

こは意ふに、京都のあたじけなきをそしりしなるべし。

### 儒者は唐人の屎



伊勢貞丈は、世に聞えたる諸禮家なり。和學古實にくはしく、著述の書ども頗る多し。貞丈常に曰く、儒者の説に、學問すれば賢人となり。その上修行すれば聖人となるといへるは非なり。四書五經を讀み、詩を賦し、文を作るとも賢人にはあらず。只人倫の道を行ふものは、學ばずとも賢人なりと云ひ、儒者の唐めきたるを笑ひてよみし歌に

からくど口はきけども愚者くど

くされた儒者は唐人の尿

おこしもの

むかし梶原景季。化粧坂の少將が許に通ひけるに。あるとき如何なしけん。刀をおき忘れて歸りければ。そを送り届けるどて

いそぐどてさすが刀をわするは

と少將のよみける歌に。景季返すどて

かたみどて置てこし物そのまゝに

かへすのみこそさすがなりけり

當座の出來ごゝろ

江戸に狂歌さかんに行はれたる頃。ある所に狂歌の開卷ありて人々多く寄り集ひ。當座の題を出して詠みあへりしに。何某といふ人。世にきこえたる古人の歌を焼直して。わがもの顔に出しければ。かたはらの人。その歌こそは。古人の歌を盗みたるなれと云ひければ。何某大に怒りて。かにかく云ひあへりしを。其席に列りしある老人。その中に立入りて。二人をすかしなだめ。さて詠みける歌に

ざれ歌もふつと當座の出來ごゝろ



いひかけしたり古歌盗んだり

妻子を振捨て行く

文政のころ、花の下道といへる狂歌師ありけり。松田某と呼びて。狂歌はいとをかしき口振なりき。天保六年正月十四日妻子をのこして歿し。深川淨心寺に葬る。そが辭世の歌に

先の世へわれは道中双六の

さいしをあとにふり捨てゆく

性がきらひじや

人の性として好嫌ひあるは、何人も同じことながら。蜀山人は常に芝居を好み、名高き俳優の中に知人甚だ多し。さるに獨り中村歌右衛門のみは、忌み嫌ひて行通ひたることなし。ある時歌右衛門の吃

又平の番を持來りて。贅を請ひしものありければ、蜀山人とりあへず

上方の役者は性がきらひじやと

いはんとしては吃の又平

と認めあつしと云ふ。

松永貞徳のふしん

何時の頃にや、松永貞徳卯花を詠みし歌に

卯の花はどこから降れる白雪と

空にふしんの雲やたつらん

とありけるに、狂歌堂眞顔これを見て

貞徳がたてしふしんに根柢して

白壁とみる垣の卯の花



とよめりとぞ。

やぶれごろも

蜀山人は好酒なりしが。ひと歳故ありて禁酒せしに。元より好むことして。まらずく禁酒をやぶりければ。今は是非なしとて。よまれし歌に

わが禁酒やぶれ衣となりけり

さして貰ふついで貰ふ

### 志賀理齋の庵

志賀理齋は。舊幕府の御金藏奉行を勤めし人にて。老後下谷中町のほどりに住せり。このあたりは閑静の地にして。晝も狐狸の庭面に戯るゝことあり。夜は水鶏木蕨など來りて。風流の心をなぐさむ。

こゝにさゝやかなる庵をむすびて。雨露を凌ぎぬるも君が恵にこそと。詠める歌に

はら鼓うちひろさも野狸の

きん玉ほどの庵なりけり

### 大こんじきの光

天明度の饑饉のときには。路傍に餓死するもの少からず。米の飯は容易に食ひがたし。富める人も飯に大根を交せて食せしとぞ。その頃蜀山人ある家に行きしに。例の大根飯を出せしかば

椀のうち大こんじきの光さし

ぼさつの影は見えつかくれつ

米の名をぼさつと云へば。この歌いとをかし。

### あひ口の鞘



曾呂利新左衛門は、和州大鳥郡の人にて、後堺にうつり住み、鞘を造りて生業とす。豊太閤に愛せられしこと、世の人のよく知る所なり。ある時曾呂利が家の門に、何者にや一首の歌を張置きぬ。その歌は

柄の間もそばはなたじと召されけり

きみがこころはあひ口の鞘

くらはんか船

烏丸光廣卿、あるとき難波に下向のをり、淀川のくらはんか船を見

て、よみける歌に

くらはぬかくらはんかにはあかねども

喰ふ蚊にはあく淀のあけぼの

椽のはしる

むかし唐衣橋洲、芝のほどりに用事ありて行きし歸途、春日の社の椽側に腰打かけて、まばし憩ひけるに、社人心あるものによ、煙草盆など持出して、かにかくともてなしければ

煙草盆出しかすがの宮柱

ふとまありしもえんのはしあか

通と答へて消えなまし

四代目松本幸四郎は、名優の家より出でしにあらぬど、四代目團十郎の門に入りて、藝術をばげみしゆゑ、遂に名人とはなれりき。さるに五代目白猿に辱しめられ、江戸には居悪くなりて、大阪へ登りけるに、かしこにては評判あしかりければ

悪玉かなんぞと人のとがめなば

通とこたへて消えなまじ物を



と一首の狂歌を口吟み。暇乞もそこ／＼に中山道を経て江戸に歸りしと云ふ。

岡部にたゞのり

蜀山人ある日高松家へ行きしに。饗膳をくだされ。お吸物にて向かな一首と御望みありければ。まづ椀の蓋をとりて見るに。豆腐に海苔をかけたるものありき。蜀山人とりあへず

郎等はまだかけつけぬ其内に

岡部のうへに忠度があり

として聞え上げしとぞ。

馬琴の當意即妙

瀧澤馬琴が許に或る人。短冊一片を持ち來りて。馬琴がかねて詠み

ける歌の

ほす網も屠蘇のふくろのなりに似て

いはふ銚子のはまのはつ春

を書きて給はれといひければ。易きほどの事なりと順て墨すり筆持ちて。短冊の上に海邊初春の四文字を題し。さて先づほす網のど書くべきを。思ひ違ひて屠蘇とかきぬ。こは誤けりとまばし躊躇へしに。その人他の歌にても苦しからずといひければ。その筆の儘に

屠蘇くまぬ浦の筥屋も春くれば

香に糸ふ門の梅の花貝

どかきて與へぬ。その人馬琴が當意即妙なるをいたく感じあまたし喜びを述べ。推戴きて歸りしと云ふ。

いせのすゑ風呂



馬琴又ある時伊勢に行き、津に宿りて、さてゆあみせんと。女に案内させけるに、此處なりと指す方を見れば、戸棚のごときものあり、傍に大なる桶ありければ、これぞ湯ならんと思ひて、衣服を脱捨て、戸棚に入れんとせしに、女慌てゝそは衣服を入るゝ所にあらざ、ゆあみする所なりといふ。さてはと思ひ、衣服はかたへに置き、彼の戸棚のうちに入りけるに、湯は尺に満たず、傍の桶は水桶にてぞありける。馬琴をかしさの餘りに  
ものゝ名もところによりてかはるなり  
江戸の戸棚はいせのすゑ風呂  
と詠みしとぞ。

祝儀のだしなほし

今の市川團十郎、明治二十三年一月京都の祇園館にて、二の替に忠

臣藏を出し、七段目茶屋場の所にて、下廻の衆に祝儀をやらんと。何程かの金を投げだし、召仕の男に吩咐けしに、その男一力違ひにて、眞の一方樓に赴き、主人團十郎より當家の女中衆に少々ながらと差出せしに、同樓にては不審と思ひども、厚く禮を述べて歸せしに、此方の團十郎は毎時もと違ひ、下廻のもの一人も禮に來らざれば、いと怪しみ前の男を呼びて祝儀は如何にせしと問ひしに、「へい遣りました、まかも樓主が出て禮を申しましたと云ふにぞ。いよいよ訝しく、段々聞いて見ると一方の茶屋場違ひなりしかば、果は大いに笑にて、改めて祝儀を出直せしといふ。

右を出したり左を入れたり

明治五六年の頃、浪華に中村歌津右衛門といへる中芝居の座頭あり、ある時讃州金毘羅に買はれて行き、狂言の薄雪に、歌津右衛門伊豆



守と剛九郎を勤め、今の片市。その頃は蝶十郎と呼びて、大膳と正宗をつとめしが、歌津右衛門鍛冶屋の場にて、無き筈の右手を出せしかば、観客承知せず、手が生へた〜と云ふ。歌津右衛門吃驚して左手を隠す。観客又騒出して、それでは腕が違ふといふ。歌津右衛門いよ〜戸惑ひ。右やら左やら知れなくなり、右を出したり左を出したり。滅茶苦茶に演ぜしかば、観客ます〜躍氣となり。イヨちよろんけん踊と云ひ囃し。一幕めちや〜。

### 釣好と相場好

ある歳新富座にて、紅葉時金澤實記を演ぜしとき、今の成田屋小田大炊の役にて、末廣屋前田佐渡守を勤め、山の幕に、大炊日和が續いて宜しいといふ臺詞なりしに、末廣屋かねて團洲が釣好なるを知れる故、不圖隠れに「左様で御座る。この日和なら釣でも致して樂

しめますと突然にいはいはれ。團洲も吃驚せしが、これも末廣屋が相場好にて、その時買方に廻り居るよしを知れる故。少しもぬからず。されば相場でも買つてるものは、定めて氣が揉めませうと答へ。この場はそれで済みしが、その米意外に下り三十六錢の狂を生じて。末廣屋は五百圓ほど損毛せしとはをかし。

### 幸四郎死際の實境を見る

四代目松本幸四郎、まだ歳若き頃、柳橋のある家にまば〜行通ひしが、素より人目を忍ぶことゝて、何時も送りの者只一人を伴ひ、頭巾眉深に目立たぬ扮装にて行きけり。さるにこの事早くも土地の遊人の知る所となり。ある夜幸四郎の通ふを待受け、ソレ叩擲れ。打殺せと騒立ちける。此方は臆病の幸四郎。吃驚仰天して一目散に驅出し。人なき方に逃行きしが、折しも霜月中旬の夜風。身を切る



許りに寒く、臘月後見らるる心地して其怖しきこと云はん方なし。漸く米澤町より南に切れ、一生懸命に逃延びしが、もはや呼吸切れて咽喉乾き一步もあゆめず、井戸もやあらんと四邊を見れば、此處は濱町山伏井戸の傍にて（文化の頃は旗本邸のみにて夜中は往來の人もなし）はじめて寂寥しきことを思出し、例の臆病風ソツト身に染みて、毛孔もよだち、これから何處へ逃げんかと、心も空に二足三足行掛けると、井戸の邊の小暗きところに、頻に悶へ苦しむ聲聞ゆ、これは不思議と恐々ながら透し見れば、こは如何に、四十路に近き町人跡の男、血汐の朱に染みて大の字形に倒れ居りぬ、まさしく物奪強盜の爲業か、但しは新刀の試斬か、いまが最後の断末間、手負は兩手を以て、虚空を掴む苦痛の軀に、幸四郎いよ／＼吃驚し足は頭へて地につかず、進退維谷りて怖しき響へんに物なし、如何はせんと躊躇しが、其處が後世名人と呼ばれ、龜鑑をのこすほどの

人なれば、腹のうちに思ふやう、是れまで度々舞臺にて、人の死ぬ真似又は切腹する役を勤めしが、いまだ他人に殺されたる死際の實境を見しこと無し、幸ひ今夜の人殺し、傍に人のなき中能く見届け置かんと、平常の臆病も忽ち落付き、そろ／＼手負の傍にゆき、月の光に窺へば、此方は虚空を掴む七轉八倒、見る間に呼吸絶えてもぬけの亡骸とはなつたりける、ア、人間の死際は斯るものかど、つく／＼會得して心に喜ぶ折柄、送りの者四五人打連れ、駕籠を釣らせて馳せ來り、親方此處にかもう大丈夫と、駕籠に載せて事なく和泉町のわが家に歸りしは、はや夜明近き頃なりき、幸四郎はこの折こわ／＼ながら、彼の人の最後の狀を親しく見、爾來舞臺にて殺さるゝ役を勤むるときは、この断末間の軀をうつし、兩手に虚空を掴みて苦しむ軀を摸せしに、高麗屋が死際の仕打は、實に類なしといよ／＼觀客の喝采を博したりと云ふ。



### 佐藤繼信の墓

佐藤繼信の墓は、京都寺町北側民家のうしろにあり。永仁三年二月二十日願主法西と彫りて、碑銘はなし。むかし一人の旅僧。この墓を尋ね、來りて讀經回向し、左の歌を詠みて手向けぬ

あはれなり君の命をつぎ信が

志るしの石は若ころも着て

そのをり苦の下に。微に聲ありて

をしめどもよも今まではなからへじ

身をすてこそ名をばつぎ信

と返歌せしといふ。信じがたき説なれども。ある人の隨筆中に見え  
たれば。こゝにかい付けぬ。

### いま西行

むかし風月庵似雲といへる僧ありけり。莒州廣島の人にして。攝州須磨寺の西南。源光寺といへるに舊庵のこれり。この僧常に名蹟靈地を。こゝかしこと遊歴して。住所をさだめず。一生雲水に身を任して終りぬ。墓は河州廣川寺に在り。當時この僧をば人皆今西行と呼びしとて。ある時詠みける歌に

西行に姿ばかりは似たれども

こゝろは雪と墨染の袖

### 橘洲肖像の賛

唐衣橘洲

あのれの肖像を描かせ。これに賛していへらく

青雲の志は花鳥にうばはれ。白雲の情は風月にいざなはれて。あけては酌み。くれては飲み。たゞ醉郷に身をばぶらし。壺中の天地を睥睨に見て。つひ白髮の年とはな



他人のそら似

りぬ。  
いたづらに只の親父となり歌  
身の能どては酒のいれもの

尾州の人。志の、玉浦といへるは。東都の橘洲におもさし生寫にて  
かくもよく似たる人は珍らしと。その頃の人いひ合ひりしかば。橘  
洲あるとき

君とわれいかに似たるか身をふたつ

かれてもすゑにあはんとぞ思ふ

と玉浦の許にいひ贈りしに。その後もあはで。玉浦亡き人の數に入

りしかば。橘洲又

われに似し人と思へばます鏡

わが影ながらわれとなづかし

猿にしてをけ

五代目市川白猿。ひと歳浪華に在りしとき。加茂季鷹より

白猿を見ざるきかざる人だにも

いよ親玉といはざるはなし

とよみて贈りしに。白猿が返しの歌に

つがもない親玉など、呼子鳥

猿にしてをけく

狂歌坊主の頓智

安永天明の頃なりき。四谷天龍寺のほどり。狂歌坊主といふもの  
ありけり。元は商家の子なりしが。利欲のことを嫌ひ。家を捨てし



かゝる身とはなりけり。日々人の門に立ちて錢を乞ひ。錢をめぐま  
るれば。狂歌一首をよむ。故に何時しか人呼んで狂歌坊主といひに  
き。ある時目黒日紋谷の仁王尊。効験いちゝるしとて。參詣する者  
夥多しと聞き

日もん谷の仁王さんでもしやつたか

爺やお婆々がこもりにぞゆく

又その頃堀の内妙法寺の祖師も繁昌して。參詣人諸多ありしかば

堀の内日蓮大ぼさつま芋

まゐるひと山さんもんのうち

と詠みしといふ。この坊主は世人のよく知るところなれど。その終  
を詳にせず。

### 關三が必死の苦しみ

關三十郎初めの名を花助と云ふ。性來心好き男なりしかば。度々先  
輩の慰物となることあり。ある時何の狂言なりしか。獄門の役に廻  
はり。例の凝性ゆる。その首人形にては面白からず。是非とも本當  
の首で行きたしと。いろく工夫し。仕掛にて組竹の上に首を載せ  
首尾善く演じて喝采を博したり。この折今の菊五郎。關三の首見て  
やらんとて。竊に正面に行き居りしが。不圖關三が臺詞をいふをり  
鼻をひくく、させる癖あるを思出し。何か悪戯をして困らせんと思  
付き。そつと同人の後にまはり。脇の下から手を入れてくすぐり。  
又は灸をもち行きて踵に點えるなど。手を替へ。品を替へて悪戯を  
したれど。此方は先輩の菊五郎なれば。まさか怒もされず。死首  
を見せて居ることゆる。口も利かれず。得意の鼻をひこつかせるこ  
ともならず。必死の難義をなして。幕になると直様菊五郎の部屋に  
行き恩辭をこぼせども。菊五郎は知らぬとて取合はざれば詮方なし



さりどて狂言の邪魔になる故。何とか工夫を凝らして、この悪浮戯を防がんものど。早速小道具部屋に至り、具足を出して呉れど云へども。この狂言に具足の入る筈なれば、小道具方不思議に思ひながら、望みの通り、具足を與へけるに。これなら大丈夫と大に喜び幕の明く前になり、件の紙鎧を着用したるにぞ。内幕のことを知らぬ小道具方吃驚して、てつきり關三氣が遊ひしに相違なしと。慌てふためきて立者及び頭取の部屋に驅付け、「唯今尾張屋(關三のこと)が氣が違ひましたと言觸せしかば、三階一同大に驚き、「なに關三が氣が違ひしと。夫れは大變。兎も角も見舞に行かんと。菊五郎をはじめ打揃ふて、關三の部屋に行きしに。關三はさる騒動のありしとも知らず。意氣揚々として構へ居るゆゑ。一同不審とは思ひしが。さりどて發狂せし様子もなければ、段々聞いて見ると。關三菊五郎を指し。音羽屋さんが毎日悪戯をなさるのが苦しく。やつどの思付

で鎧を着けました。これならくすぐられても、灸を點えられても、びくとも爲ることぢや有りませんと、誇顔に語りしかば。初めて具足を着たる所以が判り。果は大笑にて事済みたりとぞ。この關三は斯くまで藝道熱心家なれども、臺詞などには一向頓着せず。重言片語勝手次第にて。抱腹に堪えざること尠からず。ある地方にて太閤配十段目を出せしとき。關三光秀を勤め、「武王は般の紂王を亡し。わが朝の北條義時は帝を流し奉ると云ふべきを。何う間違ひしか。北條義時は筏を流し奉るといひしには。人々大笑なりしと云ふ。

### 團十郎の謙遜

明治二十七年頃。歌舞伎座引續き不繁昌なりしに。その頃團十郎と九藏どの顔合ありめづらしくも。大入大當なりしかば。座主をはじめ。團十郎は云ふまでもなく。最負連の喜び一方ならず。殆ど手の



舞ひ足の踏む所を知らざるほどなりき。その時某紳士、築地の團十郎が家を訪ひ、今度の政岡且元は天下無類なり。大入大當は左もあるべしと口を極めて稱賛せしに、團十郎は頭を掉りて、いなく、今度の客は全く仁木の客です。私も久振りで本當の仁木を見ましたと云ひしとか。團十郎の謙遜愛すべし。

立役ありなら安し

澤村國太郎。前名を市川壽美之丞といふ。わかき時歌右衛門の弟子となり。中村かほると稱ひしが、後同人の養子となり。一ヶ月金二兩宛。實の父母の方へ送つてもらふ約束なりしに、當時歌右衛門の生計甚だわるく、約束の金も名のみにて送ることなかりしかば、両親の困難一方ならず。かほる之を見て、断然志を決し、歌右衛門が病中脱走して離縁を求め、實家に歸りて以前暫く師匠としたる七代

目海老藏の門に入り。ぐにや富の名跡を繼て中村富三と稱し、葺屋町に出勤中八代目の引立により、名題に上りて市川壽美之丞と改めその後大坂に來り、二代目澤村國太郎の家名を襲ひ、有力なる女形とはなりぬ。この男女形にてありながら、立役を好み、遠國の芝居師等、太夫を買ひに來るときは、毎時立役ありなら安く、女形ばかりなら高くいふゆゑ、その癖を吞込んだる芝居師等は必ず立役を交ることにして約定せしと云ふ。

遊びすごせし穴

六時園多利雄は甲州府中の隠士なり。性温順にして物にかゝづらはず。心長きこと他人に越えたり。日に道をゆくこと七里に過ぎず。家にありても何ひとつ物することなく。今日は彼れを爲さん。明日は是れを爲さんといひて、遂に爲さず。その居る所もいと汚穢して



掃きさう除したることなし。ある人曾て多利雄を訪ひしに。澤庵漬の大根一切れ喰ひさして。机の端にありけり。物臭き人よと思ひけるが。十日あまり経て再び訪ひけるに。去ぬる日の澤庵漬の喰ひさし。いまだに取捨てず。机の端にありきと云ふ。ある歳の大晦日に懸取の來るをうきことに思ひ。おのれは居間に閉籠りて出でず。入口の障子に一首の歌を

かけこひの鬼のすみかをたづねれば

遊びすこせし穴にぞありける

懸取の人々。この歌をみて皆打笑ひて歸りけるとなり。

### 一九の歳暮

十返舎一九。ある歳の大晦日に。懸取の來りせむるをうるさく思ひ夕暮より家を出で。そこ此處とさまよひあるきけるが。柳原の邊

に日頃むつみかたらふ友のありければ。取敢へずその友の許に行きけり。友はいましも酒飲みて樂しみ居りしかば。一九も共に酔ふて打騒ぎ。はては立ちて踊り狂ひぬ。一九は素より丈高かりければ。不圖かたへの棚に頭を打付けたり。只見ればこの棚は。筋違へに釣れる年徳神の棚なりければ。一九忽ち

正月ははや神田まできたりけん

筋違につるとし徳のたな

と口吟みけるに。その友面白くおもひて。隣あたり持て行きて。かに角と語合ひきと云ふ。

### 寶の山ほととぎす

ある酒店の主人。一九の許に來りていへるやう。某いぬる頃名ある畫師に頼みて。床の襖に描かせけるに。月に時鳥をかきたり。時鳥



は蜀魂。又は血を吐く鳥など云ひて。いとく忌はしき上に。月は陰のものなりといへば。常に心にかゝりぬ。善き歌詠みて給はらずやと請ひぬ。一九いと易きことなりと筆執りて詠みし歌に  
月は笠鳥のかたちはみのに似て  
これやたからの山ほどゝぎす

歌種の滑稽

壺椿櫻歌種は。野州鹿沼の人。俗稱を笠屋繁三郎といひ。性として遊藝を好み。糸竹のしらべ妙にして。歌ふ聲又きよらかなり常に感言いひ。をかしき形して人を笑はしければ。皆興あることに思ひ。酒の席などには呼び來りて。興を添ふることあり。ある夏の半頃。暑氣最と烈しき日。歌種清らなる綿の單衣着て。菅の小笠打傾け。家を出で、何處へか行かんとせしに。一人の小童喘ぎく來りて

歌種ぬし何處へか行きたまふ。今日しもわが主人。客人をば招きければ。あん身を招きて酒をすしめ。歌ひものゝ一曲をも聞かまほしと。さては己をして迎はせ給ふなりと云ふ。歌種聞きてそは極めて興あることなり。されど己止みがたき要事ありて。外に出行けば暫時待ちたまはるべし。頓てかへりて参りなん。主人へも善く聞えよといひて別れぬ。さて歌種は要事ある方に至り。事果て歸りけるに途にて雨降出で。空一面に掻曇りて。神さへおどろくしく鳴りはためき。電光四方に飛廻はるさま。いと恐ろしく詮術を知らず。只ある山寺の二王門に駈上りて雨宿りせしに。暫時ありて鳴神の音は止みたれども。雨は未だやまず。歌種はや歸らんと思ひ。着たる衣をば脱ぎ捨て。帯もて確と領に結び。赤條々になりて四邊を見れば金剛の前に大なる草鞋掛かれり。これ幸なりと取下して打冠り。走り歸りて呼び迎ひられたる家に行きしに。家の人々この状を見て笑



ふて止まず。歌種主人に向ひ。今日はさがたき要事ありて。さる方に行きしに。途のほとりにて雨に遭ひ。詮方なくて二王門にありつる草鞋を冠りて急ぎ来りぬといふ。彼の小童打聞きて。歌種ぬしは先に小笠持て行き給ひしに。何故草鞋に替へたまひしやと云ふ。歌種雙の掌を礎と打ち。さても其許のいへる如く。己その笠は二王門のかたへに。置忘れて来りぬと云ひければ。聞く人々皆そこにてけ轉びて打笑ひ。かの客人も出来りて笑ふほどに。隣近所のものも亦この話を聞きて大に笑ふ。主人取敢へずその草鞋冠りたる所にて一首よみ給へと云ひければ。歌種

山寺の二王のわら玄笠にきて

あしもそらなる夕立の雨

と物しぬ。人々ますく興に入りて。さて人を備ひて彼の寺に遣はせしに。笠は尙ほそのまゝありしと云ふ。

氣が違ふたか鹽谷判官

故人風瑠瑠の弟子風壽瑠は。性來の滑稽者にて。ある年今の片市及び實川菊次郎等と一座にて。播州明石に赴き。一興行爲せしことあり狂言は忠臣藏にて。菊次郎判官を勤め。壽瑠師直を勤む。例の喧嘩場に至りけるに。判官の菊次郎。師直の顔が可笑くて堪へられず。あまり其方に氣が移りて。つひ鹽詞を間違ひ。「氣が違ふたか武藏守といふべきを。」氣が違ふたか鹽谷判官と。判官みづからうづかりと言ひしかば。師直の壽瑠吃驚して如何にせんと思ひしが。菊次郎のあなを塞いで還る氣にてもありしか。「黙れ判官といふべきを。」黙れ師直と云ひしかば。場中大笑ひとなり。これにて幕。

權太ではない



ふて止まず、歌種主人に向ひ。今日はさがたき要事ありて、さる方に行きしに。途のほりにて雨に遭ひ、詮方なくて二王門にありつる草鞋を冠りて急ぎ来りぬといふ。彼の小童打聞きて、歌種ぬしは先に小笠持て行き給ひしに。何故草鞋に替へたまひしやと云ふ。歌種雙の掌を礎と打ち、さても其許のいへる如く。己その笠は二王門のかたへに。置忘れて来りぬと云ひければ。聞く人々皆ここにこけ轉びて打笑ひ。かの客人も出来りて笑ふほどに。隣近所のものも亦この話を聞きて大に笑ふ。主人取敢へずその草鞋冠りたる所にて一首よみ給へと云ひければ。歌種

山寺の二王のわらぎ笠にきて

あしもそらなる夕立の雨

と物しぬ。人々ますます興に入りて。さて人を備ひて彼の寺に遣はせしに。笠は尙ほそのまゝありしと云ふ。

氣が違ふたか鹽谷判官

故人風瑠瑠の弟子風壽瑠は、性來の滑稽者にて。ある年今の片市及び實川菊次郎等と一座にて。播州明石に赴き一興行爲せしことあり狂言は忠臣藏にて。菊次郎判官を勤め、壽瑠師直を勤む。例の喧嘩場に至りけるに。判官の菊次郎。師直の顔が可笑くて堪へられず。あまり其方に氣が移りて。つひ臺詞を間違ひ。「氣が違ふたか武藏守といふべきを。」氣が違ふたか鹽谷判官と。判官みづからうづかりと言ひしかば。師直の壽瑠吃驚して如何にせんと思ひしが。菊次郎のあなを塞いで遣る氣にてもありしか。「黙れ判官といふべきを。」黙れ師直と云ひしかば。場中大笑ひとなり。これにて幕。

權太ではない



嵐三津五郎、大和下市に買はれ、千本櫻の狂言に權太を勤めしが、  
従來の扮装を改め、土地の破落戸風にしたら、定めし好評を博すべ  
しと思ひ、さまざまに辛苦して、糸髪奴に白の脚半を付け、上に引  
廻しを着けて出でしに、観客承知せず。これぢや權太ではないと案  
外にも評判悪しかりしと云ふ。

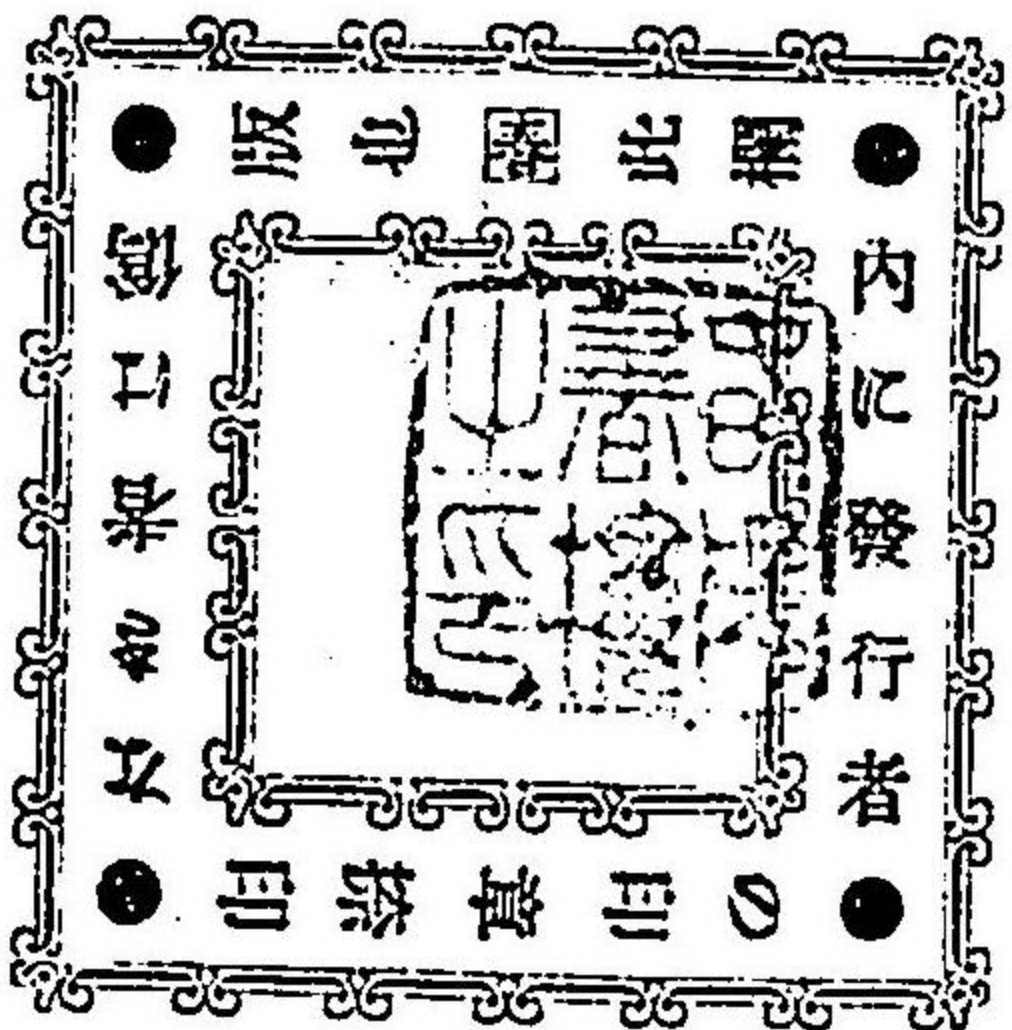
名人逸話終

明治二十九年八月十七日印刷  
同年八月二十日發行

名人逸話奥付

實價金廿五錢

版權所有



著者 風流翁

發行者 和田篤太郎  
東京市日本橋區通四丁目五番地

印刷者 島連太郎  
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

發行所 春陽堂  
東京市日本橋區通四丁目

印刷所 株式會社 秀英舍  
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地  
電話五拾壹番  
(電話十八番)



# 特別割引箋

## 稟告

- 一 江湖御花主標方の御取立により日に倍し盛大に相成奉深謝候向世運風潮に先だち文學社會に録々たる大家方の手に成る新規新案の原稿相遣ひ挿圖製本に注意し逐次出版致候間愛顧諸君方存倍御愛覽の榮を給はらん事を希望仕候
- 一 此買價書目の外百段の書籍は御命令に隨ひ御取次仕候間書名著者出版人等御記載御注文願上候尤も直段は無油斷他店より一層廉價に相働き候間自然高價にも差上候時は御申越次第直引可申候
- 一 送金方は内國通運便早送又は銀行或は江戸橋郵便本局宛等のかげせにて何れも前金に御願申上候
- 一 御注文書若三日以内に必ず出荷可仕候
- 一 此切取紙へ品物御書入御注文の御方へは該買價書目の内特別「割引」にて御送り申上候
- 一 郵券代用は割引せず買價の一割増にて願上候
- 一 宿所姓名は可成御明瞭に楷書文字にて判然御認願上候
- 一 御親友御同僚中小説雜書御愛讀の御方の宿所御姓名御通知願上度拙店より早速書目御送り可申候
- 一 前件申述候通り下段及裏面に書入場所有之候間御注意願上候

東京日本橋  
通四丁目角

春陽堂

和田篤太郎

電話五十一番

切取線

書籍を購求せらるる諸君の住所氏名	御注文主の住所氏名



要摘書文	箋 文 注					書 目 冊 數
	金	金	金	金	金	
小計ノ金	金 金 金 金 金					書 目 冊 數
	金	金	金	金	金	
	運賃	郵税				書 目 冊 數

切取線

### 大元帥陛下御眞影

### 皇后宮陛下御眞影

各一兩幅一尺一寸六分長一尺七寸五分二面買價八十錢特別減價六十四錢にて誦て頒布す郵税寄留料二面迄八錢

徴しく推るに我  
徴聖文武 天皇陛下 征清の宣詔 あらせ給ひてより深く  
大本營を露島に進められしより日出度馳陣に至り玉ふまで風夜軍  
に大御心 帝國臣たる者朝夕御盛徳にて感泣せし  
んや誠に御村氏 御眞影敬寫の允許を齋戒  
沐浴して 天 大元帥の御正服 皇后陛下亦  
御正装 を召させ給へるの眞影を拜觀し 兩陛下並に皇太子  
に 注意周到 洵に世間未だ曾て見ざる所なりとの賛辭を  
あれども拒絶して撰りに寫さ 誠意誠心 を以て 諸御  
すの弊黨今同強て同氏に就き 寫せしめて以て擴く皇愛國の志士に頒たんと欲するなり今や  
寫 此御眞影の好誦に際會しの一室必ずす能へて 諸御に安置し生民  
堵に安んじて以て祝瀾を酌むの天恩に感謝せざるべからずと謹んで  
四方に告ぐ

### 日清交戦録

全部買價金貳圓特別減價金壹圓四十錢送料四十錢

我日清交戦録が特筆大書して江 寫眞版口畫 及碼研の材  
湖に誇らんとする所以のものは 寫眞版口畫 料なり江  
湖幾多の同種類中、能く斯の如きの好材料を蒐集したるものある  
へし、恐らくはあらざるべし、然して國民の血闘外人の 觀察敵國の内情等  
らくはあらざるべし、然して國民の血闘外人の 觀察敵國の内情等  
各部門に従つて記述し 總目錄 を附して索引に便を興へたり  
此合本に就ては特に 戰死 戰功 將士の 挿畫は有名の 諸伯  
の 挿畫及び 戰死 戰功 將士の 挿畫は有名の 諸伯  
の 挿畫及び 戰死 戰功 將士の 挿畫は有名の 諸伯  
舟氏等にして 記事 は黄海の海戦、宣戰詔勅の發布以來韓和  
を一圖落として爰に二號より四十號迄十卷つゝを合巻四冊となし  
たれ 野史正史 軍記として見るべく今後幾千の後に在り  
々として天に沖せんとするの有様を追想するに餘りあるべし

### 日清交戦録補遺

全二冊合本正價四十錢 特別減價三十錢 紙數六百頁











四則二百五十餘集

大島孝造著 定價九錢 郵稅二錢

新式算術

宮本久太郎著 定價未定 郵稅未定

此に近世物理學を著して理學社會に一機軸を出し、然るに更には其活眼を平常嗜好推究せる所の數學界に披きて、世間普通の教科書參考書等の弊を觀破し、今や第一着手として本書の著あり其例題の適切なる説明の丁寧簡明なる蓋し修學者の指南車たるべし。ものは本書を措いて他にあらざるべし。

小學地圖集覽

全一冊 實價各廿五錢 郵稅各四錢

日本ノ部大版地圖十一枚外國ノ部大版地圖七枚此圖ハ偏ニ小學兒童ノ課業用ニ充ンガタメニ出版セラレタルモノニシテ、勉メテ兒童ノ視力ヲ害セサル様ニシ、且ツ地圖ニ必要ナル條件ハ大抵之ヲ備ヘタリ、徒ニ無用ノ地名山川ヲ排列シテ兒童ノ視力並ニ精神ヲ害スルガ如キ地圖ト大ニ其撰ヲ異ニセリ教育家ノ鑑識ヲ乞フ。

小説稗史

寸珍の冊子四種の好文を萃めて、家々案上の清玩に足る、其文品を論ぜば、紅白毒饅頭は縝密、伽羅物語は清奇、花くもりは絢爛、女の顔は洗練。



紅葉山人作 實價廿五錢 郵稅六錢

尾崎紅葉氏常に好んで短編を綴る、數年の著作五十餘種に及ぶと雖も、未だ曾て伽羅物語の如き長編を見ず、金剛石の徑一寸なるもの、特に寶惜すべきなり、而して其着想は濃麗婉約、其行文は瘦勁清深、所謂紅葉山人の腦髓收めて此一卷に在り製本クニス金文字入大本。

日本之部

世界圖 亞細亞圖 日本國圖 同溫帶圖 海流圖 火山圖 測量圖 植物分布圖 軍備圖 日本北部圖 東北部圖 中部圖 南部圖 四南部圖 三府五藩圖 本書の特色は(一)土地の高低一目瞭然たり(二)人口一百万以上の市町村は圖を披けば則ち判然然を指すが如く小學の兒童も指摘に迷ふの恐なし(三)景色優雅にして野鄙ならず 故に之を小學校、中學校、師範學校等に用ゆるも或は士君子の座右に備ふるも最適當の良書なり。

外内地圖集覽

附錄 世界各大洲山川、人口、產物 本一冊 實價四十五錢 郵稅八錢

本書の特色は日本地圖集覽に因する特色の外に「近隣諸國及南洋諸島の別地圖を載する」と是なり松島の特に思を致せること此點にあり日本製的地圖集覽にて此の如きは世間絶無なり坊間普通の地圖に比して天地の相違あり之を小學校、中學校諸學校に用ひて最適切なるのみならず經世家、貿易家等に資するも少からず。



紅葉山人作 實價三十錢 郵稅四錢

片断は、何者とも知らず、何處より來れるとも分らず、忽然として深夜の門を叩きし一女子が好顔の特點なり。春日蘆舟は渠の幸領として、野に河に幾十日の眠食を興にしたりしも、竟に其正體を觀破することなくして己みにき。これや果して蘆舟が眼の不明なるか、はた片断の變幻自由なるか。十三行二十七字の百六十頁は坭々之を語りて、遺櫂を雲烟模糊の間に指點すべし。



紅葉山人作 實價廿三錢 郵稅六錢

此れは紅葉山人得意の作にあらずと雖も、其生平の苦吟運筆に似ず、三日半夜にして一氣呵成せるもの、輕々若筆して意を經ざる裏、自づから氣韻の生動せるを覺ゆ。



### 新色懺悔

新色懺悔は著者が新聞紙上に驍足を展べ得たる第一着の傑作小説なれば、其落想の奇、觀察の精、行文の妙知るべきなり。



紅葉山人作  
武内桂舟書  
實價廿五錢  
郵税四錢

### 命の安賣

命の安賣は文學世界之内、紅葉山人作、實價八錢、郵税二錢。薩摩の武士赤岩弾介義を重じて一命を六蔵の醫麥切に換ふ。事已に奇なり、文堂奇ならざらむや。此書筆を弄せずして諧能自然に出づ。滑稽の上乗なるもの。

紅葉山人作  
武内桂舟書  
實價八錢  
郵税二錢

### 紅鹿子

紅鹿子は夏瘦關東五郎の二編より成る、前者は燭を乗りて雨後の海棠を看むが如く人の忽ち消現せざるはなし。後者は什麼、全然面目を一變し來りて、洞頭月白く松影無き處、怪禽一聲耳を掠むに似たらむか。讀者巻を捲ふて愕然たるべし。



紅葉山人作  
武内桂舟書  
實價廿五錢  
郵税四錢



紅葉山人作  
武内桂舟書  
實價三十錢  
郵税六錢

雪と見紛ふ櫻の木蔭に、數奇悉したる一構の主や、誰ぞ、嬋娟花の如き美人なるか、魁偉無鹽の如き醜婦なるか、或は世に捨てられし尼なるか、或は世に許みたる流の身なるか、書肆も知らず、書工も知らず抑も著者の心を知るものは、巻を繰く讀者ならんか。



紅葉山人作  
實價十錢  
郵税四錢

此編唯甲乙の談笑し、張李の怒罵するを聞くのみ。敢て叙事の筆を費さずと雖も、口氣真に逼りて、思や、嬌や、癡や、頑や、眉目自から喬くが如く、一舉一動躍々として己に不説の間に盡せり、紅葉山人が文と才とを打して一九の土の團子即ち是なり。



紅葉山人作  
無名氏書  
實價廿五錢  
郵税四錢

夏小袖は武家西家の一小茶話に過ぎざるなり。一の奇なる無く、談更に傳ふべきものならず。文は坦々として險語を見ず、易々として警句を挿まず、譬へば柳外風度り、月下に水の流れむが如し。若夫披讀一過せば、筆々傷まざる無く、悲まざる無く、言々愁へざる無し。蓋し情の最も切にして、文の最も至れるもの乎。



紅葉山人作  
鈴木華村書  
實價三十錢  
郵税六錢

「なにかし」一巻は豫備兵義血の二篇を収めたり。冷々水の如き豫備兵は、報國の熱によりて其身を焼き、烈々火の如き俠美人は然諾の重きが其に其情を冷却せり。彼の熱、此の冷。人心の變幻なる、其境に應じて熱たり冷たりと雖も、感ずる所は一片の意氣なるのみ。百八十頁の快語は此意氣を説明して、迅雷、奔流、天を碎き、地を劈く。概あり。若夫巻を披かば想に鬼氣ありて毛髮に逼り、文は異彩を放ちて顔色を照さむ。



八内之日書行發堂陽春京東

お艶は歌麿の美人の如く、紅梅は北齋の妖婦の如く、お才は豊國が筆の傍あり。妬むもの、驕るもの、讀むもの、それらの特性を寫して、一帖の活錦繪を展ぶるに似たらむは、紅葉山人の三人妻なり。夜半人無く此編を披かば、幽園の裏孤燈の下佳人來るの思あらむ。



三味道人作  
省亭米仙合作  
實價三十錢  
郵税六錢

一代の偉才を抱いて世に容れられず、坎坷流落して江湖に流し、世を恨み時を慨して嗟伏する事、空しく、大坂の城に天下の俊傑をなげんき、男兒の乗す可き舟を知らざれば、何處の世に大名を擧げんき、衆將に先んじて入城し、一方の旗頭となつて、大名天下に高く、一度長劍を抜いて陣頭に臨めば、關東關西の精兵も又膝を破る。彼は強勇新の如く、鬼神に似たれども、悲しき果して涙なきか、彼は泣き彼を悲しむ故を知る者なく、爾來三百餘年の今に至りては、彼の名をさへ知り傳ふる者だに稀に成たりしを、今再び三味道人の筆によりて、春陽堂の店頭に現はれり。才子佳人の戀情談のみ耳を食す者は、其破腹の破烈するが如きの感あるべし。

九内之日書行發堂陽春京東

夫れ着物にも餘所行と不斷若とある、其又不斷若とある、裏と表とが若にも何れ一處目では解らぬ處が、浮世と云ふ物の常である、さても其油断のならぬ浮世に、こればかりは掛直のない友仙染、所謂泥中の蓮葉ならぬ、花も實もある染草は、禊めず變らず上等用品、胡亂に思召すらん方は、イザち手に取って御覽あれ。



友遊山人作  
仙實價二十錢  
染郵税四錢

著者已に夢中にして、昔肆又夢中なり、讀者豈夢中ならざるを得んや、これ櫻痴居士が近作の最白眉



櫻痴居士作  
小永與  
實價廿八錢  
郵税六錢

高い山の山の上より、利たる眼光を放つて下界を洞見したるもの、題して浮世見物といふ、僞紳士僞豪傑が浮世の表裏を往來する様々怪々描くか如し。



浮世見物  
櫻痴居士作  
水野年方  
實價廿五錢  
郵税六錢

櫻痴居士の豐富なる文才は、今説かすもあらなん、其輕妙なる筆は、百代の片々として飛ぶが如く、時に轉じて嚴格の筆鋒を動かすは、實に泰山の巖然として、磐石の押せども動はぬが如し、本編は、櫻痴居士の此種妙なる其嚴格なる筆を以て、或は優美に、或は豪邁に、或は得ては、或は内式部等の事、文章を弄び、巧み極まる未だ勤王の供を寫し出し、雖も、明治の照代並に一人の知己なからずとせんや。



山縣大凱  
富岡永洗  
實價三十錢  
郵税六錢

桂姫は如何なる美人ぞ、亂れたる世を慨し時を怒りて、忽然現はれし一筒の名玉、粉々たる碧血光裡に時ならぬ花を咲かしめたり。



新十二番之内  
實價三十錢  
郵税六錢

春雨傘  
櫻痴居士作  
渡邊省亭  
實價三十錢  
郵税六錢

櫻痴居士の豐富なる文才は、今説かすもあらなん、其輕妙なる筆は、百代の片々として飛ぶが如く、時に轉じて嚴格の筆鋒を動かすは、實に泰山の巖然として、磐石の押せども動はぬが如し、本編は、櫻痴居士の此種妙なる其嚴格なる筆を以て、或は優美に、或は豪邁に、或は得ては、或は内式部等の事、文章を弄び、巧み極まる未だ勤王の供を寫し出し、雖も、明治の照代並に一人の知己なからずとせんや。



櫻痴居士作  
三島蕉窓  
實價廿五錢  
郵税六錢

尺の身に伊達模様の袴さばき、大江戸に一名物を添へし町奴で御座るは、今日此快絶壯絶の書いづ人は、花に眠り月を酔ふは、字々飛動、句々靈結、拵の奇抜斬新は、如き情を寫し來つて、讀者の大俠が、肉を動かす、思軒居士が、自筆の健壽は、優に大俠の動きなり、描出し著者が、且一回毎に嚴肅の細評ありて、一層の觀を添ふ、疑ふ者は試みに細け。



村上浪六作  
全  
實價二十錢  
郵税四錢

櫻痴居士の豐富なる文才は、今説かすもあらなん、其輕妙なる筆は、百代の片々として飛ぶが如く、時に轉じて嚴格の筆鋒を動かすは、實に泰山の巖然として、磐石の押せども動はぬが如し、本編は、櫻痴居士の此種妙なる其嚴格なる筆を以て、或は優美に、或は豪邁に、或は得ては、或は内式部等の事、文章を弄び、巧み極まる未だ勤王の供を寫し出し、雖も、明治の照代並に一人の知己なからずとせんや。



かた糸

かた糸を彼方此方によりわけて、糸たか... 文藝世界之内... 櫻痴居士作

五月蠅の世の中を、傍外一葉の芭蕉の蔭に避けて、... 櫻痴居士作



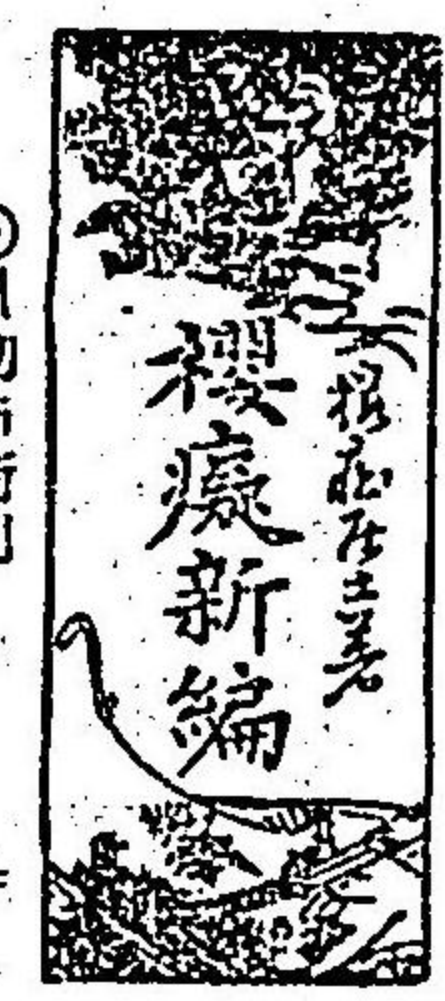
積徳知放言 櫻痴居士作 郵税六錢

法螺でかためた浮世を吹き仆さんと... 櫻痴居士作

源六氏が引絞つたる満月の弓勢、... 櫻痴居士作



たそや行燈の影暗きところ、... 櫻痴居士作



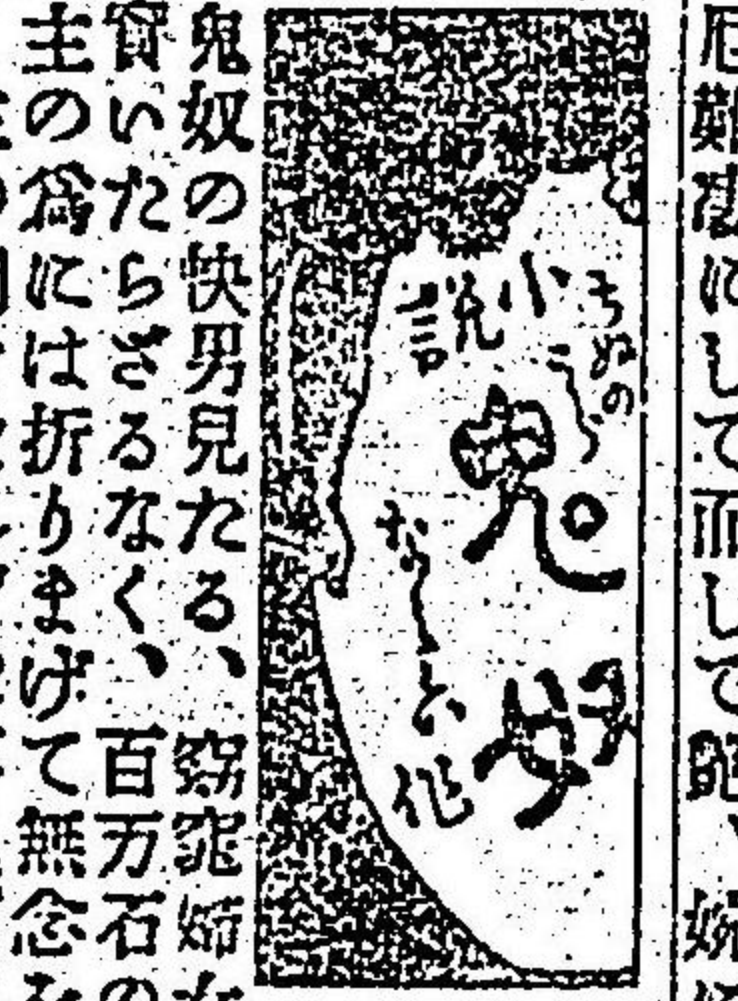
櫻痴新編 櫻痴居士作 郵税六錢

徳兵衛何人ぞ、或は俠客の如く、... 櫻痴居士作



夜風 櫻痴居士作 郵税六錢

夜風や大岡様の櫻符、其花やかさに... 櫻痴居士作



鬼奴 櫻痴居士作 郵税六錢

打てば轟く山鹿流の陣太鼓如何なる音を出す... 櫻痴居士作



破太鼓 櫻痴居士作 郵税六錢



三十内之目書行發堂陽春京東



三年味附青嵐の二篇は合して萬紅葉と成り、人の眉山人が當年の傑作、青嵐は浮世の裏に潜み、めら怪を寫し出し、窈窕たる處女が其渦中に苦み、ましたり、然かも汚穢に染まざる一點の靈氣を點出、ます所なきは、蓋し山人得意の所なるべし。



白髭の森影に俗塵を避けて、墨水の流れに錦腸を洗ひ、夜々筆を執つて漫筆を草す、風蕭々として雨の艶となり、御若衆の麗と忽ち馳せて、或は藤娘の如く、奴の律義となり、雷の如く吐號し、沙頭の如く世間を恐れず、而して桂舟子大津繪の活幅、又近時無双と稱せらる。

六漫筆  
村上 瀆六 作  
武内 桂舟 畫  
實價 三十 錢  
郵税 六 錢

川上 眉山 作  
武内 桂舟 畫  
實價 二十 錢  
郵税 四 錢

萬紅葉  
川上 眉山 作  
武内 桂舟 畫  
實價 二十 錢  
郵税 四 錢

二枚  
川上 眉山 作  
武内 桂舟 畫  
實價 二十 錢  
郵税 四 錢



武士にして武士にあらず、俠客に似て俠客にあらず、伊賀の山中よりフナリと出て來たる猪の介殿、名は恐ろしく懐まじけれど、姿は月をも花を欺か



こはもと野草のつたれ咲、牛かふ童の熊手の先に、かゝりて、播いて捨てられ、春陽堂の主、人の訪ひ來て、我がまど賑はさん、のたきつけにも、きふしは少なくとも、書いたわたり、丁々子自職

二枚  
神の筆を以て優婉の二篇より成る。婉曲清潔、白藤の筆を以て後園に宛轉たる情思を、地に委し、空しく香魂にして花を落す事類、なりの異彩に、至りては、他流に傑出したる、思一番、仔細に、作が、更なる、幽宮の消息を傳ふる、らば、縹渺たる神韻の、更に幽宮の消息を傳ふる、のあらむ。

塚原 澁柿 園作  
武内 桂舟 畫  
實價 卅五 錢  
郵税 八 錢

田邊 太一 著  
寺崎 廣 畫  
實價 十五 錢  
郵税 四 錢

川上 眉山 作  
武内 桂舟 畫  
實價 二十 錢  
郵税 六 錢

二十内之目書行發堂陽春京東



主も取らず君にもつかへず、涙を、ザンブと、双腕に蹴、儀をも恐れぬ六尺の渾身を、こころりとさして、只無茶苦茶、億男兒深見重左が半生を例の、描き山でたる大々文字なり。



三日月の影にチラと見え、三日月の影にチラと見え、てヤイノ、と焦れたる女、んで顯れたり、著者は、六、せす、表紙口語等の刷、めたるは本店のまだ此、上ぐ女の助は男なり、姿ばかりを見せ、玉ひ

井上 瀆六 作  
水野 年方 畫  
實價 三十 錢  
郵税 六 錢

安田 ちぬの浦 瀆六 作  
渡邊 省亭 密 畫  
實價 三十 錢  
郵税 四 錢

深村 上瀆 六 作  
武内 桂舟 畫  
實價 廿五 錢  
郵税 六 錢

笠見 深村 上瀆 六 作  
武内 桂舟 畫  
實價 廿五 錢  
郵税 六 錢



元龜天正に明智が三羽鳥と唄はれしその一羽の勇士、本能寺の一番駈して織田信長に槍をつけし曲者、死して亂臣賊子の墓を、いま瀆六氏の筆に吊はれて懐吟可憐の老武者となりぬ、あはれ世に幾多の才子佳人よ月露花に飽いて夜静なる枕頭、燈火の影に緋いて三百餘年の昔を忍び、鬼の目よりも、玉ふもまた一興ならむか。



「かゝり舟」の波に騒ぎ、「撫子」の露に咽び、「清涼」のさし月色に色めきて、春の花に奔ひ、く柴車の一番となれり、奇嬌凄婉、句々悉く清貧の價を語るに難からず。

川上 眉山 作  
武内 桂舟 畫  
實價 二十 錢  
郵税 六 錢

鎌倉 武士 新十二番之内  
南 新 二 作  
水野 年方 畫  
實價 卅三 錢  
郵税 共

川上 眉山 作  
武内 桂舟 畫  
實價 二十 錢  
郵税 六 錢

川上 眉山 作  
武内 桂舟 畫  
實價 二十 錢  
郵税 六 錢











